JIC インフォメーション

第206号　2020 年4月 10日
年 4 回　1･4･7･10 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所:JIC 国際親善交流センター　発行責任者:伏田昌義　http://www.jic-web.co.jp
東京オフィス:〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F　TEL:03-3355-7294　jictokyo@jic-web.co.jp
大阪オフィス:〒540-0032 大阪市中央区谷町 2-7-4 谷町スリースリーズビル 7 階　TEL:06-6944-2341

ロシア・旧ソ連 国際交流誌

http://www.jic-web.co.jp

写真：左上＝ソヴィエト初期の女性労働者ポスター　右上＝JIC ロシアセミナー貝澤哉先生講演会（11 月 23 日）　右下＝レストラン「キエフ」研究会で五十嵐徳子先生講演会（11 月 24 日）　左下＝本誌 19 ページ参照（ロシア人女性の生活意識）

＜JIC ロシアセミナー＞ 講演録
「スターリン時代のソヴィエト文化における女性主人公像」
……貝澤 哉（早稲田大学文学学術院教授）‥‥2P
＜ロシア映画祭 報告記＞
ロシアへの愛を込めて～＜繋がる＞ご縁
第１章「手作り映画祭！！のはじまり‥‥‥田島瑠采奈‥‥10P
トルストイ読書感想文コンクール‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥10P
＜レストラン「キエフ」ロシア研究会＞ 講演録
「現代ロシア人の生活と意識について」
……五十嵐 徳子（天理大学国際学部教授）‥‥14P
シベリアの愛　私とロシアの出会い‥‥‥‥稲塚 俊介‥‥21P
新型コロナウィルス禍　危機の連鎖を断ち切ろう‥‥‥‥‥‥23P

JIC では、Ｊクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年４回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

JICロシアセミナー(19年11月23日)

2019 年 11 月 23 日、JIC ロシアセミナーを東京で開催しました。講師は貝澤哉先生(早稲田大学文学学術院教授)。「スターリン時代のソヴィエト文化における女性主人公像」という、ちょっと取っつきにくいテーマではありましたが、講演では初期ソヴィエト時代のポスターや絵画、それに映画作品がふんだんに紹介され、終わってみれば実に楽しく興味深い講演会になりました。当日紹介された写真や映像資料を全部掲載できないのは残念ですが、講演録でその一端をお楽しみください。(文責;編集部)

スターリン時代のソヴィエト文化における女性主人公像

～美術と映画を中心に～

貝 澤　哉(早稲田大学文学学術院教授)

1917 年 11 月(露暦 10 月)にロシア革命が起こり、いわゆるボリシェヴィキ(共産党)が政権を握ります。史上初めて社会主義・共産主義を掲げたソヴィエト政権がロシアに誕生しました。

実は意外に知られていないことですが、ソヴィエトというのは世界で最初の女性解放国家だったんですね。なぜかと言いますと、ボリシェヴィキが掲げた理想は「人間の平等」、すなわち私有財産を廃して平等な社会を作るということでした。そこから、民族の平等であるとか、男女の平等といった政策が出てきた。つまり、政府が政策として男女平等を掲げた国はソヴィエトが歴史上初だったわけです。

ソヴィエト＝世界初の女性解放国家

実際はそんなにうまくいかなかったんですけれども、ボリシェヴィキ政権は「女性の解放と平等」という政策を実現するために、まず家庭を解体しようとしました。ロシアの伝統的家庭では父親や夫の家父長的支配のもとで女性が従属させられている、だから家庭自体を解体してしまおうと考えた。さらに自由恋愛。当時の道徳的な制約を廃して自由恋愛を奨励する。その当然の帰結として女性は労働しなければならない。女性が経済的に自立できることで平等が実現されると考えました。

家庭を解体するために、例えば、幼稚園・保育所、それから集団食堂を作って、子育てや家事労働から女性を解放するという方策がとられました。もちろんロシアは広いので、実際にそういう施設が十分作られたかというとそうではなかった。しかし、そういうことも一応やろうとしてはいたのです。

実はこの女性解放政策には裏の事情もあった。第一次世界大戦とロシア革命で男性の労働力が減っていたわけです。女性を動員しないと労働力が足りない。そういう事情があって、女性の労働力化を進めざるを得なかった側面もあるわけですが、それにしてもソヴィエトというのは世界で初めて「女性の解放」を政策に掲げた国であったということです。

1930 年代半ば「大後退」期から伝統回帰

ところがこれまでのソヴィエト史研究では、1930 年代半ば、通常は 1934 年ごろからと言われますが、その頃から「大後退」期と呼ばれる時代が始まり、ソヴィエト政権は保守化したと言われています。

1924 年にレーニンが死んで、スターリンが権力を完全に掌握したのが 1920 年代の終わりごろです。スターリンの権力基盤が固まった 30 年代の半ばくらいになると政策が転換されて、むしろ保守的な価値観に回帰していく。それまでは前衛的な女性解放を唱えていたのですが、そうではなくなって、伝統的なジェンダー観念への回帰が始まったというのが定説になっています。

「ジェンダー」というのは「性役割」、つまり社会的な女性の役割、男性の役割を指す概念ですが、「女性はこうしなければならない」といった考え方が、古いものに帰っていく。ソヴィエトでは 1930 年代半ばから、「家庭を大事にしろ」とか、「出産をして育児をしなさい」、「家事をやれ」とか、そういう昔の価値観に戻っていったというのが定説なんですね。

英語圏の研究者はこの伝統回帰を「二重の重荷」と呼んでいます。つまり、女性は一旦解放されて、みんな労働者とし

て職業に就いているわけです。仕事をしているんだけど、それが 30 年代の半ばになって、「家事をやれ」「子育てもやれ」ということで、仕事をしながら家事も育児もやるという二重の重荷を背負わされる。むしろ余計に大変になってしまったというのがソヴィエト社会の実態だったのではないかと言われています。

新しいタイプの「ソヴィエト的家族」の模索

ところが、ソヴィエト時代の美術や映画において、女性が主人公になっている当時のものをつぶさに見てみると、伝統的で保守的な家庭の概念、つまり帝政ロシア時代と同じような女性観・家庭観に 1930 年代半ば以降本当に回帰したのかと言うと、実は意外にそうではないということがわかってくるのです。

単に伝統的な、保守的な概念の中に回帰していくのではなくて、実はそこに新しいタイプの「ソヴィエト的家族」というものを、少なくとも理念的には作ろうとしていたのではないかということです。先走って言うと、これを今日の私の話の結論にしようと思っています。

ただし、気をつけなければならないのは、プロパガンダ（思想・政治宣伝）というものは、要するに権力側の理念的宣伝であって、実際そのとおりに実現していたわけではないということ。これからお話しする内容は、当時のソヴィエト社会で実際にそうなっていたということではなく、あくまでも映画や美術などにおいて、「こういう女性像が理想だ」とソヴィエト政権が一生懸命に宣伝していたということです。このことを念頭に置いて聞いていただきたいと思います。

美術や映画に描かれた「理想的女性像」

そういうわけで、1917 年にロシア革命が起こって、内戦が収束した 1920 年代の初めぐらいから、ソヴィエトでは新しい女性主人公像というものが、プロパガンダとして出てくるようになります。ポスターもそうですし、美術もそうです。映画や文学でも、女性の解放が描かれる。

特にスターリンが権力を掌握する 1920 年代の終わり、1929 年から農業集団化が開始されます。コルホーズ（集団農場）やソフホーズ（国営農場）ができて、農村が集団農場に組み替えられ、農民が労働者化されるわけです。その時に、一番抵抗したのが農村の女性だったと言われています。当時、ロシアはヨーロッパで一番遅れた国で、農村人口が多く、非常に保守的な社会でした。田舎の農村地帯では、女性自身が保守的な価値観をいわば内面化して生きているので、農村の女性が農業集団化に最も抵抗したということだったようです。ですから、農業集団化を遂行するために、女性が意識を改めて、旧来と違う先進的な女性に生まれ変わるというようなストーリーのものがたくさん作られるようになる。ソヴィエト初期の文化の中には社会主義的な女性主人公が映画や美術の作品のなかに頻出します。解放された理想的女性像をわかりやすく提示しようとしたわけです。

そこで描かれた女性の身体、女性の姿――学術的な言葉では「表象」と言いますが――は、絵画や言葉などの形をとって表象されます。そこで注意すべきことは、われわれ個人の身体というのはみなプライベートなものですよね。しかし、それを外側に見せる、あるいは見られる時に、例えば「自分は労働者なんだ」というような形で、いわば公的なものとして見せているわけです。表象された女性の身体が、プライベートでありながら、しかし一方である種のパブリックなものとつながっている。これがプロパガンダの特徴なのですが、その形が徐々に微妙に変化していく。そのことと、さきほど述べた「ソヴィエト的な家族」の誕生ということとが関係してきます。

用意した画像や映像を全部見ていくととても時間が足りないので、一番特徴的なものをいくつか見ながら説明していきたいと思います。

Ⅰ．美術、ポスターにおける女性の表象とその変遷

『十月革命は女性労働者や農婦に何をもたらしたか』（1920）

これは、女性が前面に出たものとしては、現存している中で一番早い時期のプロパガンダのポスターです。ちょっと見にくいですが、背景に描かれている建物の看板を読むと、女性労働者のクラブとか、幼稚園とか、食堂とか書いてあります。

つまり、食堂や幼稚園を作ることによって女性が家事労働から解放されて、労働ができるようになるというわけです。この女性労働者の像については、イギリスの著名な歴史家ホブズボームが論文を書いていて、「これはどう考えてもリアルな労働者の像ではないだろう」と言ってます。左手に持っているのは金槌で、いで立ちからすると鍛冶屋のようにも見えますが、この時期に女性の鍛冶屋などいないし、スカートをはいてエプロンしているのも変です。これはある種の理想像として描かれたもので、現実の女性労働者の像ではないだろうと述べています。

コチェルギンの『1920 年メーデー』

これも非常に早い時期ですが、男性の農夫と労働者がいて、女性は鎌を持っているので農婦ですね。農村の女性です。男性が前にいて女性は後ろにいるので、これは必ずしも女性を前面化したポスターではなくて、労働者・農民を全体的に動員するポスターですね。

ここで少し特徴的なことを指摘しておくと、

ロシアの女性は、プラトークと呼ばれるスカーフを頭にかぶります。ポスターの女性は、プラトークを顎のところで巻いている。プラトークをかぶった女性はこれからたくさん出てくるのですが、この顎のところで巻いているのは農村の女性という印で、まだあまり意識的に目覚めていないということを意味しています。これが、自覚的な女性労働者になってくると、プラトークを頭の後ろで縛るようになるのです。

右は、アヴァンギャルド的なスタイルで、ちょっと抽象化されたポスターですね。構図が斜めに作られていて、前衛的な感じがします。1925 年の作品です。題名は**『女性労働者と農婦はみな選挙へ』(N. ヴァレリアノフ作)**。

プラトークを顎で巻いている人もいれば、後ろで縛っている人もいます。女性労働者たちは、一応スカートは履いていますが、非常に凛々しいというか、きりっとした表情をしていて、体つきも肩がすごく張っていて、労働者の理想的な体型ですね。女性のフェミニンな美しさではなくて、労働者であることを強調するために女性的なものをわざと抑えて中性化しています。

1930 年代の半ばくらいまでの女性労働者の表象の仕方というのは、ごつい体格や険しい顔つきで、女性的なものを抑えて、むしろ男性的な力強さを強調するものになっています。

『集団作業に向かう』Ⅰ・メシェリヤコヴァ

1929 年の作品です。農業集団化を宣伝するための絵画ですが、トラクターが大きく描かれています。ソヴィエトの農業集団化プロパガンダには必ずトラクターが出てきます。トラクターを使って機械化することで農業集団化を遂行する。トラクターが農業集団化の象徴になっていて、このあとお見せする映画にもいっぱい出てきます。

ここでもやっぱり女性労働者は、がっしりした体つきです。真ん中の女性がトラクターを運転しているというのも、当時としては斬新なんですね。「女性が機械など動かせるはずがない」というのが当時の伝統的な見方だったので、あえて女性をトラクターの運転手にして、女性にもできるのだということをわからせようとしているわけです。

次は **G・シェガリ**の有名なポスターで、タイトルは**『台所への隷属よさらば！ 新しい生き方を』(1931 年)**です。構図が斜めになっていて、多少アヴァンギャルド的なスタイルが残っています。家の戸口から女性が外へ出ようとしている。外の建物には食堂とか、保育所とか書いてある。手前の家の中では家事労働、洗濯をしていて、お湯を沸かすポットがある。そういう家事労働の場から外に出て、新しい生き方、つまり労働者となって働くことを奨励するポスターですね。

『コルホーズ作業班長』(1932)という女性班長を描いた絵画があります。女性が班長になるということは男性の上にも立つわけですから、当時の農村の伝統的な見方からするとそれ自体が非常に斬新なことでした。したがって、凛々しく、きりっとした表情で、肩幅も広くて、そういう中性化された女性の姿で描かれています。

ところがですね、1930 年代の半ば以降になると、女性労働者の描き方やその雰囲気が変わってくるのです。

紡績工場のようなところで、女性がスカートを履いたまま半袖姿で働いている絵がありますが、工場自体も清潔で、コルホーズとか農村の感じとは全然違う。女性もわりとお洒落に着飾っているようなものが出てきます。

右は**『ボールベアリング工場の訪問』(1937 年)**という絵です。訪問している方もされている方も、ある種のおしゃれな服を着て、髪もセットされていて、工場も非常に清潔な感じです。

第一次世界大戦とロシア革命の混乱の中で、女性が化粧をするという習慣自体がロシアではなくなっていたらしいので

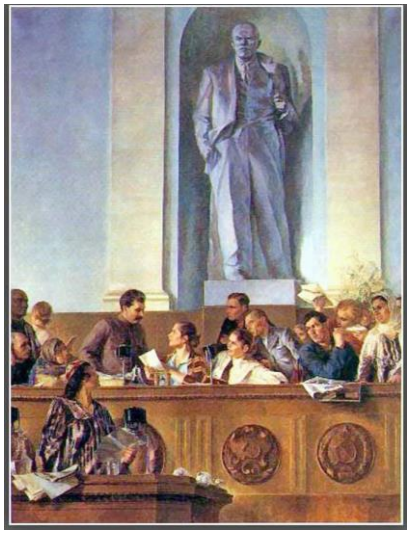
すが、1930 年代の半ばくらいからそれが復活して、女性たちが化粧をするようになったという研究書もあります。

ピメノフ『新しいモスクワ』(1937 年)

モスクワは 1930 年代半ばに再開発されて、街並みがきれいになりました。当時の映画でもその街並みがよく出てくるのですが、この絵が面白いのはオープンカーを女性が運転していることです。この当時、車を持っているというだけでかなり富裕層で、社会的地位の高さを予想させます。普通の人は車なんて持てない。しかも、オープンカーです。着ている服もおしゃれですね。ソヴィエトは社会主義の国でしたが、何かブルジョワ的な感じすらする絵です。

少なくともモスクワのような大都市では、こういうものが風俗として出てきていたということですね。

G・シェガリ『指導者、教師、友人』(1937 年)



これも有名なものですが、ポスターではなく絵画です。中央左にスターリンがいて、何か原稿を持った女性がこれから演説するところでしょうか、スターリンと目線を交わして会話しています。

スーザン・レイドという研究者は、これは女性がスターリンから指導を受けているところだと言っています。スターリンが父親的指導者の役割で、女性は指導される娘のようになっていて、そういう意味で伝統的な家族観と合致している。要するに父親が娘に教えを垂れるというような家父長的な家族観ですね。

演壇にいる女性は、綺麗な服を着て、髪型や顔立ちもきっちり化粧をされて女性的な感じが出ています。これが 1930 年代的半ば以降の特徴です。1920 年代から 30 年代の前半までは、逞しく、がっしりとした男性的な（あるいは中性的な）女性像であったのが、1930 年代の半ばから女性的な女性像に変わっていくわけです。

こういう形で、旧来の古い家族観に 1930 年代半ば以降少しずつもどっていったというのが定説となっているわけです。

ところが、1939 年に第二次世界大戦が勃発し、1941 年 6 月から独ソ戦が始まります。ソ連はナチス軍に攻め込まれて苦戦します。ソヴィエト社会は完全に戦争モードに切り替わりました。戦争に入った瞬間に、女性の像はこういう「母なる祖国」という形になってしまいます。ポスターは、**I・トイゼ『母なる祖国が呼んでいる』(1941 年)**。志願兵を募集するものです。戦争中は、このように母なる祖国や銃後の守りのイメージを流布するポスターがたくさん作られています。

1945 年にベルリンにソ連軍が攻め込んで、ヒトラーが自殺し、第二次大戦にソヴィエトは勝利しました。

Ⅱ．映画における女性の表象と身体

では、次に初期のソヴィエト映画に登場する女性像を見ていきたいと思います。

その前に、帝政ロシア時代の有名な映画女優の一人で、ヴェーラ・カラリという人の写真を紹介しておきます。もとはバレエのダンサーで、ボリショイ劇場のプリマドンナから映画女優になりました。無声映画がロシアで国産化され始めたのが 1908 年。1910 年代からメロドラマが大量に作られるようになって、有名な映画俳優が出てきます。その中のトップ女優の一人です。この後に見るソヴィエト映画で描かれている女性主人公たちといかに違うか比べていただきたいのですが、帝政ロシア時代の映画の女性主人公というのは、どちらかというと、色が白くて線が細いというか、ちょっと憂い顔で、ある意味で女性らしさを出した主人公像のものが多いです。

S.エイゼンシュテイン監督
『全線（古きものと新しきもの）』(1929 年)

これはまさに農業集団化が始まったときの作品です。まだ無声映画です。マルファという農婦が主人公で農業集団化に打ち込んでいるんですが、その作業に疲れて昼寝をしていると、夢を見るんですね。夢の中に巨大な牛が出てきて、その牛が雲になってそこから牛乳が雨のように降ってくる。エイゼンシュテインお得意のモンタ

ージュで、海のように牛乳が生産される場面です。牛乳の分離器からはバターが大量にできる。また、豚もたくさん生まれて、食肉がどんどん生産されていく。

　するとこの夢がそのまま現実になって、未来的な国営農場のシーンに移行します。農場の建物は、当時としては非常にモダンで、まるでドイツのバウハウスのような前衛的な建物をロケ地に使って、未来の集団農場の姿を描いています。マルファの夢はいつの間にか現実になっていて、夢を見ている間にも集団農場が近代化された姿で実現するわけです。

　次はこの映画の最後の方のシーンですが、やっぱりトラクター出てきます。トラクターが故障して修理しているところです。実際に公開された映画ではカットされているのですが、あとでこのトラクター運転手とマルファは結婚するという設定に本来はなっていたようです。これは、この時期のソヴィエト映画に典型的なのですが、コルホーズの生産量を上げたり、労働英雄になったり、つまり社会主義的な貢献をすると、それによって恋愛も成就して、結婚したり、家庭が築けたりする。そういうストーリーになっているものが非常に多いです。

　マルファとトラクター運転手が一緒にトラクターに乗って共同作業をしています。他の農民たちは保守的なので、馬を使って耕作している。「俺たちは馬で良い」と言ってトラクターに見向きもしない。それに対して「じゃあ、トラクターの力を見せてやるよ」っていうわけです。馬一頭だと荷車一つしか引けない。それを全部の荷車を一台のトラクターにつないで引いてみせる。農夫たちはびっくりします。最後には、トラクターが死ぬほど出てきて、みんなで行進して終わる（笑）。本当にトラクターが大好きなんですね。実は、ソヴィエト初期にはロシア国内でトラクターが生産できなかったので、アメリカのフォードのトラクターを輸入していたという話です。

L. トラウベルク、G. コージンツェフ監督『女ひとり』(1931 年)

　これは無声映画に後からアテレコで音を入れたものです。冒頭のシーンに出てくる女性主人公は大学生なんですが、惰眠をむさぼっているところです。目覚ましが鳴ってるのに起きようとしない。労働もしてない。結婚して妻になって、家事労働して暮らそうかなとか思っている。そういうダメな女性という設定です。

　ところが、ソ連の大学というのは、ソ連解体までそうだったんですが、学費が無料である代わりに、卒業後の就職先が国に指定されてしまうんですね。彼女は、アルタイの辺境にある羊毛コルホーズに学校の教師として派遣されます。羊の毛を刈る作業をしている人たちのところへ来て、「役所はどこですか？」と聞くのですが、「とんでもないところへ来ちゃったな」という感じがよく出ています。

　次のシーンは、もう教師になって働いているところです。

　実は、子供たちが学校からみんないなくなってしまう。村の大人たちに駆り出されてヒツジの番などに行ってしまって、学校の勉強に出て来ない。そこで主人公は怒って、村ソヴィエト、つまり村の役所に談判に来る。ところが、今度は村ソヴィエト議長の男性が寝ていて、それに対していろいろ文句を言っている。ここで立場が逆転でしてるんですね。

　村ソヴィエト議長の妻も出てきます。議長の妻は家事労働と子育てをしている。つまり、古いタイプの家庭のあり方をそのまま表している。「何とかして下さいよ」、「あなた達は子どもたちが哀れじゃないんですか？」と主人公は言うわけですが、この妻も「あなたたちの子どものことなんか私は知らないわよ」みたいなことを言って、全然取り合ってもらえないわけですね。アルタイ人は遊牧民だったときの風習を残していて、昔の伝統を墨守して暮らしているということです。

　その次は、ついに堪忍袋の緒が切れて、女性教師が村の長老のところに談判に行くシーンです。ところが逆に脅される。「お前は誰なんだ？」「俺たちの邪魔をするな」と言われて、やりあってるところに、あらかじめ呼んでおいた町の共産党の人たちが馬で助けに来る。これで、この対決はこの女性が勝利する。こういうストーリーです。

G. アレクサンドロフ監督『サーカス』(1936 年)

　これはロシアでは非常に有名で古典的な名作です。毎年必ず 2-3 回はテレビでやっているのではないでしょうか。ご覧の通り舞台装置も大がかりなミュージカル映画です。

スターリンはアメリカのミュージカル映画をクレムリンの映写室でよく見ていて、ある日アレクサンドロフ監督を呼んで「アメリカと同じような質の高いミュージカルを作れ」と命令しました。当時、アメリカのミュージカルは世界的に流行っていたんですね。そこでスターリンは直々に命令を出してミュージカル映画をプロパガンダに利用しようとしたわけです。

主人公を演じるのはオルロワという女優で、監督の奥さんでした。この主人公は、サーカスの歌い手、芸人です。実はアメリカ人なんですが、黒人の子供を産んでしまった。当時アメリカでは黒人差別がひどかったのでアメリカにいられなくなってソ連に逃げてきたという設定です。

彼女のマネージャーはドイツ人です。1930 年代ですからナチスが台頭した時代です。このマネージャーは人種主義者で、いろんな形で彼女を脅して、安く使って儲けているわけですね。それで彼女が文句を言うと、彼女の黒人の子供を連れて来て、「この女は黒人の子供なんか産んだ奴だ」と観客の前で暴露すれば、みんなが差別するだろうと脅しをかける。ところが、サーカスの団長は、「Ну и что же?」＝「それがどうした？」と言って取り合わない。ドイツ人が逆に驚いている場面です。そうこうしているうちに、子どもが男の腕から逃げてしまう。観客は子どもを庇って、追いかける男の邪魔をします。ソヴィエトは多民族国家で民族友好を謳っているわけなので、観客たちは人種差別主義者に冷たい。こんなふうに、ナチス・ドイツの人種主義政策に反対するプロパガンダがプロットに入れられています。主人公の女性は、ソ連には民族差別がないということがまだ分かっていないので逃げてしまい、陰で泣いています。このあとがこの映画で最も有名なシーンで、ドイツ人のマネージャーが連行されて行ったあと、観客たちが黒人の子供に、いろんな民族の言葉で子守歌を唄っていくシーンです。

G. アレクサンドロフ監督『明るい道』(1940 年)

主人公は同じオルロワです。スカーフの巻き方でわかりますが、顎で巻いてますね。農村の意識の低い女性で、最初は旅館で家事労働をしているという設定です。もう一人の女性は工場の副工場長で「あなたは学校に行ったことがあるの？」と聞いて、「私が連れてってあげるから、学校に行きなさい」と言う。

次は学校のシーンで、オルロワ扮する女性は懸命に勉強して、成績優秀であることが分かります。学校のあとで彼女が見る夢には、まるでディズニーランドの宮殿みたいな工場が出てきます。この映画は全体としてシンデレラ的なストーリーになってるわけですね。田舎の意識の低い女性というところから始まって、勉強して、出世して、最後はすぐれた労働者になっていく。

次は、工場に入ったあと、寮で生活している場面です。寮の他の女の子たちが遊びに行ってる時に、彼女はひとりで工場の機械配置、一人でなるべくたくさん機械を動かして効率化を図れる配置を研究しています。そこで優れた方法を思いつくんですね。主人公は、副工場長に電話をかけて「良い方法を思いつきました！」と、効率的配置の実験を申し出ます。そして実験の場面になります。この時にはもう彼女は頭の後ろでスカーフを結んでいます。自覚的な労働者になったという印です。工場の正面にはスターリンの肖像画が掲げられています。

織物工場の中です。織物の機械を一人でどれだけの数が動かせるか、実験に取りかかる。彼女は勇しく歌って、機械がちゃんと動いて大成功する。そして、モスクワに呼ばれて表彰される。これはこの手の映画にありがちな典型的なストーリーですね。だいたい、成功して労働英雄になると、クレムリンに呼ばれて表彰されたり、大勢の前で演説したりして終わる形になります。

さて今度は、クレムリンの宮殿で、スターリンから勲章をもらう場面です。勲章もらって、嬉しくて踊り出しちゃう。そしてクレムリンの“鏡の精”に誘われて、鏡の中に入っていって、オープンカーに乗って空を飛ぶ。最後は、全露農業博覧会──今もモスクワにありますヴェー・デー・エヌ・ハー（ВДНХ）ですね──つまり社会主義生産の成果を集めた展示場に飛んで行きます。さらに彼女は実験の成功によって工場のハンサムな技師と結婚する。労働者として成功するとプライベートライフも成功するという設定になっています。

I. プイリエフ監督『コーカサスの花嫁』(1941 年)

これもミュージカル映画です。舞台はさきほど出てきた全露農業博覧会ですね。ダゲスタンの羊飼いで素晴らしい成果をあげた男性が表彰されて、その肖像画が掲げられている。女性たちは畜産コルホーズの豚の飼育員です。豚の展示を見に来て、熱心にノートをとったりして勉強している。みんなで集団行動してるのですが、一人遅れた女性が急いでいると男性とぶつかるんですね。これラブコメの常套手段です(笑)。男性は、さっき肖像画で見たダゲスタンのイケメン羊飼い。こういうわけで二人は仲良くなるのですが、もう博覧会が終わってしまうので、「来年また会いましょう」と約束して別れる。

ダゲスタンはコーカサスの山岳地帯です。羊飼いはラブレターを出そうとして身内に「筆記してくれ」と頼むんですが、その身内がロシア語ではなくダゲスタン語で手紙を書き取ってしまったので、せっかく手紙をもらったのに彼女は読んで

もわからない。そうすると、彼女に好意を寄せている別の男性が「僕が翻訳してあげるよ」と言って、「ダゲスタンの羊飼いの彼は『自分は地元で結婚します』と書いている」と嘘を教えるんですね。で、彼女は諦めて、その騙した男と結婚することになっていきます。

ところが次の年の博覧会で今度は彼女が表彰されて肖像画が掲げられる。ダゲスタンの羊飼いの男性も来ているんですが、「来年も会おうね」と約束したのに会えないので、とうとう女性のいる村にまで馬に乗ってやって来ます。騙して結婚しようとしていた男は、「これはやばい、バレた」というので、結婚式から逃げ出してしまう。花嫁支度をしている女性も、羊飼いの男性も、本人たちは手紙が改竄された事実を知らないので、最初はとんちんかんなやりとりをするのですが、話しているうちにラブレターの内容が事実と違うことが分かり、誤解が解けて丸く収まっていくわけです。

ミュージカル形式のものは、シンデレラストーリーだとか、こういうラブコメ的な物語であるとか、リアルな生活とはちょっと違う形になっていて、そこにプロパガンダが入っている。だから、楽しみながらいつの間にか洗脳されているというような、そんな映画になっています。

V. バターロフ監督『女ども』(1940 年)

これはシリアスな設定の映画です。最初のシーンでは、女性が家から出て行こうとしてますけど、これは田舎の村で、女性が「働きたい」と言うのを、夫が「働いてはダメだ！」と抑えつけようとする。女性が夫を振り切って家出するところです。

彼女は、漁業コルホーズで実験的に女性だけの作業班が作られて、これに是非参加したいというので、夫の反対を押し切って家を出る。女性作業班で一生懸命魚を獲ろうとするのですが、いろいろな不具合が起こって全然魚が獲れないんですね。面白いことに、漁業なのにトラクターが出てきます。地引網の縄を引くのにトラクターを使っている。作業班がうまく行かないのでミーティングが開かれる。実は女性作業班なんですが、班長はさすがに男性なんですね。「この班長がちゃんとやらないからダメなのよ」と女性たちが批判して、男性班長を解任して、女性の中から班長を選ぶことになります。投票したところ、あの家出した体格のいい女性が選ばれる。中にはよい男性もいて、ちゃんとトラクターを直してくれたりもする。そういう協力のもとにやり直すと、今度は獲れるわ、獲れるわ、これチョウザメですけど、これでもかと言うぐらいいっぱい獲れる。労働歌を歌いながら、大きなチョウザメを大量に獲っているところです。キャビアはチョウザメの卵です。今だととんでもない値段ですね（笑）。

一方、彼女の夫は浮気をしていて、このシーンは浮気相手の女性と一緒にいるところです。ところが偶然、壁新聞で自分の妻が表彰されているのを見つけて、妻を見直すんですね。愛人が「早く行きましょうよ」と言ってるのに、「いや、お前は邪魔するな」みたいなこと言って、ちょっとケンカしてる場面です。

ここが重要なのですが、その後、夫はわざわざ漁業コルホーズまで訪ねてきて、妻と再会するわけです。妻を見直して、照れてなかなか言えないのですが、こうやって話し合って家庭が元に戻っていく。

これが最初に言いました「ソヴィエト的家庭」ですね。つまり、夫が妻の労働をちゃんと理解して、それを支える。そういう新しい家庭ができていくわけです。功績を上げた女性主人公は漁業コルホーズの議長に出世する。夫が正装してお祝いにくる。なんと、さっきの愛人まで仲良くなって挨拶に来る。こういうパターンの映画は他にもいっぱいあります。

ですから、実は単に旧態依然たる古い家庭観に戻ったわけではなくて、少なくともプロパガンダ的な理想としては、夫は最初はやっぱり保守的でダメな夫で、酒を飲んだり、暴力ふるったり、浮気したりするのですが、目覚めた女性が努力して、成果を上げたり出世したりしていくことで、夫が妻を見直して、新たな夫婦の協力関係を築いていく、新しい家庭ができてくるということが、いろんな映画の中に出てくるのです。そういうものが実は「ソヴィエト的な家族」のある種の理想像であったのだなと思うわけです。

＜質疑応答＞

質問1：ソ連時代の家族観というか、初期ソヴィエト時代のプロパガンダがよくわかりました。この時代のプロパガンダの影響を受けた人たちの末裔である、現在のロシアで働く女性たちの考えや家族関係に、これはどのような影響を及ぼしているでしょうか？

―― ソヴィエト初期からずっと現在まで続いているのは「女性は働くものである」という考えですね。ソ連時代には、労働していない人は「徒食者」と言って、それ自体が犯罪になるという社会でした。男性であろうが女性であろうが、労働手帳というのがあって、手帳に職場が書いてないと、逮捕されて裁判にかけられるということがありました。すべての人が基本的に職業を持たなきゃいけないということで、したがって女性も経済的に自立しているわけですね。

旧ソ連圏のとくにロシアの女性は、非常にはっきりと自分の意見を言います。かなり対立的なことを結構平気で言う。男性の方は、これも帝政時代からずっとそうですが、結構だらしなくて、言い返すことができないとウオッカを飲んでDV（家庭内暴力）におよぶ。ロシアは、多分いまでもアメリカと世界1位2位を争っていますが、離婚率が非常に高い。それは、女性が基本的に経済的に自立できるからということもあるし、男性と対等な立場を持っているということもあると思います。ただし、やっぱり古い伝統として家父長的なものも残っていて、男性がよく酒を飲んでDV事件を起こすケースも非常に多いと言われています。

質問2：この後、第二次世界大戦以降の映画では女性像はどのように推移したのでしょうか？

―― 時間があればもう少し見せたかったのですが、年表で言うと 1942 年にライズマン監督の『マーシェンカ』という作品があります。これはこの時期としては驚くべき作品で、女性の主人公が出てくるのですが、何の出世もしない。普通の女の子で、デートしたり、失恋したりして、恋愛もうまくいかない。それで、第二次世界大戦前のいわゆる「冬戦争」、つまり対フィンランド侵攻に従軍して、そこで昔別れた彼氏に偶然会って話をするんですが、お互いに時間がなくてまた別れちゃう。ただそれだけの、普通の女性を普通に描いた映画で、この時期としては非常に珍しい映画です。

スターリンが亡くなったのが 1953 年ですが、そこから数年を経た 1950 年代の終わりぐらいにならないと、そういう普通の女性を主人公にして、普通の生活が描かれるような映画は出てこないのです。この『マーシェンカ』だけが非常に貴重な例外です。

ソヴィエトではだいたい 1950 年代の半ば以降になると、ヨーロッパからイタリアのネオリアリズモやフランスのヌーヴェル・ヴァーグが入ってきて、新しい映画表現がたくさん出てくる。有名なタルコフスキーなどもその中から出てくるわけですね。それと同時に、恋愛で悩んだり悲しんだりする普通の女性像が描かれるようになるのです。

有名な映画で『モスクワは涙を信じない』（1979 年）というのがあります。1980 年代に非常な人気になったのでご存知の方もいると思います。あの映画は、実は明らかに先ほど見たようなストーリーを下敷きにしているわけですね。つまり、女性は一生懸命働いて、工場長になって出世する。そうすると、スターリン時代だったら家庭はうまくいってハッピーエンドとなるのですが、この場合はそれによって家庭が崩壊してしまうわけですね。そして、ほかのもっと理解のある男性が出てきて主人公を支えてくれるというのが、『モスクワは涙を信じない』のストーリーです。明らかにソヴィエト映画の歴史、あるいはそれを知っている観客の教養を踏まえて、作った映画だと思います。

質問3：今見せていただいた第 2 次大戦までのスターリン時代のプロパガンダ映画ですが、1956 年の第 20 回ソ連共産党大会（スターリン批判）以降、スターリンの評価はすごく変わっていったわけですね。見せていただいた映画は現代では国民的映画としてたびたび観られているとお話しされましたが、スターリン批判以降のソヴィエトの人たちは、こういった映画をどのように考えているのでしょうか？ つまり、スターリン批判によって、映画自体の評価も揺らがなかったのかなというのが疑問なのですが。

―― これは難しい問題ですが、もちろん一般論としては、いろいろな評価が当然同時的にありうるということだと思います。ただし、アレクサンドロフの『サーカス』とか、プイリエフのミュージカル映画というのは、もはやソヴィエト映画の古典になっているもので、今のロシア人たちは単なる娯楽としてみんな楽しく見ているものなんですね。むろん、映画にはスターリンや共産党のプロパガンダも出てくるのですが、別にスターリン時代が好きではない人でもそんなに気にしているようには私には見えません。

不思議な現象と言えば不思議な現象なのですが、今でもロシアの DVD 屋に行くと、この手のソヴィエト映画の DVD が大量に売られています。もう著作権が切れているので、非常に安い値段でみんなが買ってるわけです。あるいは、中国でも例えば北京の DVD 屋に行くと、毛沢東時代のプロパガンダ映画が DVD 化されて売られている。しかし、第二次世界大戦後に社会主義化した東ヨーロッパでは、DVD 屋に行っても当時のものはほぼ売っていないですね。嫌な記憶なので、思い出したくもないという、多分そういう感じだと思います。

ロシアや中国では、例えば現代美術などでも、社会主義時代のアイテムが積極的に使われていますから、彼らにとってはスターリン時代も含めてある意味で歴史の一部、文化の一部になっているんですね。政治的な対立とはある程度切り離して考えているのではないかと思います。

質問者4：すごく単純な質問ですけれど、ご紹介いただいた映画というのは、実際にどういった層の方たちが当時は見ていたんでしょうか？

―― 映画は基本的に大衆的な娯楽です。一般の労働者、農民、その他多くの人たちを対象にして作られ、上映されていました。実は、映画というのはソヴィエトでは非常に重要なプロパガンダの手段として位置付けられていた。1917 年のロシア革命のあと、1919 年にレーニンが映画産業の国有化宣言を出します。当時存在していた映画会社を全部国有化してしまう。

なぜかというと、当時のロシアは識字率が非常に低かった。帝政末期の 1897 年にロシアで初めて国勢調査が行われたのですが、そのときの識字率は帝政ロシア全体で、地域によって差はありますが大体 20%から 40%程度だったと言われています。つまり、6 割以上の人は字が読めない。新聞や本で政治宣伝をしようとしてもダメなんですね。演説会が重要なプロパガンダの場でしたが、広いロシアでは限りがある。映画やポスターで視覚的に、映像的に見せるのが一番効果的だったわけです。

したがって、映画をいかに楽しく面白くして、しかも、そこにプロパガンダの要素を詰め込んで、ある程度教養のない人にもよく分かるようにするかというのがソヴィエト映画の非常に重要な任務でした。誰でも分かるストーリーで、プロパガンダをしていく。映画を観ていたのは普通の一般の人びとでした。

（2019 年 11 月 23 日、JIC ロシアセミナー）

第2回ロシア文学読書感想文コンクール
「私のトルストイ」

一昨年の第1回コンクールの成功を受けて、第2回ロシア文学読書感想文コンクールが今年も開催されます。

＜課題作品＞　レフ・トルストイ作
★中学生の部：「幼年時代」または「戦争と平和」
★高校生と大学生を含む23歳までの青年男女：
「戦争と平和」または「アンナ・カレーニナ」
＜応募期間＞ 2020年8月10日～9月11日
＊9月11日までの消印有効

表彰式と朗読鑑賞の集い
日程；2020年12月
会場；早稲田奉仕園ホール（予定）

ロシア文化フェスティバル 2020 IN JAPAN

主催；NPO法人ヘラルドの会
herald.writingcontest@gmail.com
協力；ロシア文化フェスティバル日本組織委員会
後援；ロシア連邦文化省／在日ロシア連邦大使館

協賛金ご協力のお願い

NPO法人ヘラルドの会では、この読書感想文コンクールを成功させるために、協賛金を募集しています。

協賛金額　　一口 5000円より
募集期間　　2020年10月30日（金）まで
振込先　　三井住友銀行 綱島支店
普通口座 1751497 ヘラルドの会

＊協賛いただいた個人、団体のお名前はチラシ、報告書などに掲載されます。

「ロシア映画祭 in 東京」
ロシアへの愛を込めて～♥＜繋がる＞ご縁 <第 1 章>

田島　瑠采奈（映像プロデューサー）

～「第 1 回ロシア映画祭 in 東京」手作り映画祭！！のはじまり～

＊第 1 章に入る前に、本文はご来場の皆様から頂きましたアンケートのご意見をふまえて書き進めて参ります。

映画祭の舞台裏のお話しなど、普段聴く事のない現場の状況を包み隠さずお伝えして参ります。あくまでも、私の体験からのお話しとなります。各自それぞれの見解もあるかとは存知ますが、色々な視点があるという事で、ご理解を頂けましたら幸いです。

アンケートに書かれた意見：

1 回目の全水道会館で行われたときに‥「緑の馬車」と「ドリームフィッシュ」を観ました。 今どき珍しいグダグダ感ある自主上映感が、手作りの映画祭と言えば素敵ですが、海外の映画ゲストを迎えるには残念過ぎるローカル感を感じてます。学生の催しではないのだからと言うことも気付いて欲しいです。 〇〇映画祭も毎年通ってますが、この映画祭のダメなところを学んでみると良いと思いました。 しかし、必ず伸びる映画祭だと確信してます。…。

A：忌憚のないご意見を賜りありがとうございます。真摯に受け止めさせて頂きます。今後もご意見や応援を頂けましたら大変有難く嬉しく存知ます。

私は、十数年近く「東京国際映画祭＜TIFF＞＊国の助成金4億～7億円が投入される国内最大の映画祭」に参加し、TIFFでは毎年 30 本近くの映画を鑑賞し、Q&Aを拝聴しておりますが、日本一の映画祭にでさえ、制作者・観客の両立場から運営サイドに対しての改善点や意見を持ちますので、ロシア映画祭へのご意見を頂くのは当然の事であり、厳しいご意見も温かい励ましのお言葉も両方とも真摯に受け止めさせて頂き、毎年改善を繰り返しながら、ロシア映画祭をブラシュアップしていきたいと思っております。

日本の各映画祭が抱える課題などは、頭では理解しておりましたが、いざ自分が参加する側から運営側の立場になってみて初めて、各映画祭運営側の皆様のお気持ちを理解する事が出来、「言うのは簡単だが、やるのは大変！」という事をしみじみと感じ、色々と反省しました。

●第 1 回ロシア映画祭 in 東京：2017 年 10 月 2 日～7 日開催

JIC伏田さんとの打ち合わせで分かった事は、開催まで2週間である事と限られた予算の中で運営しなければならないという事でした。私自身は映像制作業だけでなく、これまでにも色々なイベント運営には携わってきた経緯もあり、何とかなるだろうという

第１回ロシア映画祭（会場は全水道会館）

思いもありましたが、ロシアから来日されるゲストの皆様に対しての敬意を表し、同じ制作者として自分が逆の立場だったらどう思うのか？！制約の中でも出来る限りの手を尽くしたいという思いでした。

運営スタッフとして集まったメンバーは、顔見知りではありましたが、一緒に何かをする事は初めてでしたので、進め方の相違はあれど、メンバーと手分けをして準備を進める事になりました。

☆・・☆

＜余談＞

人件費のない映画祭運営の課題の一つには、スタッフは仕事として雇われているわけではない！ので、個々の判断と自主性に委ねなくてはならないという事です。お互いの持つスキルを尊重しながら、協力し合う事が大切ですが、やり方の方向性の違いによる衝突も避けきれないのも事実です。

☆・・☆

まずは、会場。どこにするのか？は、とても重要です。

映画祭の初日は、映画館で開催したいとのロシア側の意向があり、１日だけ「お台場のユナイテッドシネマ」にて、開会式＆上映を行いました。

この時に、初めてロシア側の団長セルゲイ氏とお会いしました。とても凛々しい感じのお方で、責任者としての威厳を感じました。

そもそもロシア映画祭は、プーチン大統領と安倍首相との首脳会談により、「日本におけるロシア年」という両国の文化交流事業の一つとして、開催が決まりました。ですが、ロシア文化省から急に映画祭の決定が出たようで、セルゲイ氏の会社（ゴッドキノ社）が、総力を挙げて、作品選定に入り来日ゲストとの交渉や段取りを決めたようです。あまりにも急だった為に、映画祭のパンフレットはロシア側で作成したもののみとなりました。

数部しか用意出来なかったとの事で、ご来場の皆様が購入する事も見る事も出来ない！幻のパンフとなりました。確か、表紙に箸と巻き寿司が映画のフィルムのようにコラージュされていたデザインだったかと思います。日本人からすると、思わず笑みがこぼれるような？ユニークなパンフレットでした。ある意味貴重ですね。

それにしても、海外で行う映画祭の決定がこんなにもギリギリに決めるのか？日本でしたら、半年から1年前には決まっていますね。

そこも含めて「ロシア文化！」との事で、納得致しました（笑）

☆・・☆

記念すべき、「第１回ロシア映画祭 in 東京」の初日の作品は、ストリートサッカーに熱中する若者たちを描いた映画、「ピッチ」（КОРОБКА） でした。

ロシア映画のトラディショナルな巨匠達の作品しか観る事のなかった私には、この作品は衝撃的でした。カメラワークやカット割り、ストーリー展開と、とてもテンポ感のある！作品で、今まで勝手に抱いていたロシア映画のイメージが見事に払拭されました。まさに、ロシアの最新映画を観せる！「第1回ロシア映画祭 in 東京」に相応しい1本目でした。

第一回上映作品：『ピッチ』（КОРОБКА）
エドゥアルド・ボルドゥコフ監督

☆・・☆

ロシア大使館での上映は決まっていたので、それ以外の日をどうするか？限られた予算と時間的な制約と 100～150 名位のキャパで連日押さえられる場所となると、映画館のスタイルで借りられる場所はなく、スタッフが探してきた場所が、全水道会館の会議室でした。

会場に下見に行った際の驚愕は今でも覚えていますが、イスと机がびっしりと敷き詰められていて、とてもじゃないけど映画を観る環境では到底ない！場所でした。

鑑賞しやすいように、机と椅子をどかして、上映スタイルに並べ替える作業を毎回行わなければならない！ので、現スタッフだけでは人手が足りない！のは、目に見えていました。

さらに、そもそも会議用の部屋なので、当たり前ですが、スクリーンもプロジェクターも小さく、映画上映対応のものは付帯設備にはありませんでした。

今だから言えますが、時間・予算のない中で会場を押さえて下さった事は功績だったのですが、正直この場所を選択したスタッフに怒りさえ覚えました（笑）

会場下見（事前打合せ）の日は、会場の都合で映画祭開催の数日前でしたので、あと数日で仕込む事が出来る！最善は何か？メンバーの中に映画祭立ち上げにかかわった事のあるスタッフがおりましたので、プロジェクターは、外部から映画上映のためのプロ用機材をレンタルする事となりました。

ロシア側制作のポスター

問題は、スクリーン、プロ用のスクリーンをレンタルする予定でおりましたが、会場のエレベーターは、もとより階段の幅が狭くてスクリーンを会場に搬入出来ない！という事実が判明しました。そこでスタッフの提案により、スクリーンとして代用できる白生地を購入して、バトンでつりさげて手作りスクリーンを作る事になりました。

まさにここから、手作り映画祭がはじまったのです。

毎回、スクリーンの上げ下げをして、ロールに巻いて階上の事務所に預けて保管して頂くのですが、布であるためどうしても皺が付いてしまうのです。この皺は当然、映画が投影された時にはそのまま映ってしまうわけです。そのため、アイロン掛けは必須です。

バトンでスクリーンを上げたら、蒸気アイロンを持ち込みスクリーンの皺伸ばし作業を毎回行いました。

連日同じ会場でも、日にちと時間帯によっては、他の会議やイベントが入っているので、毎回セッティング作業が必要なのです。この作業を毎日行うためには、チカラ仕事が出来る人手が必要でした。

運営スタッフは、有志が無報酬で集まったメンバーなので本業もありますし、個々が携われる準備時間の制約もあり運営スタッフのスケジュールの調整も大変な中で、さらにサポートメンバーが必要となったわけです。

運営スタッフの声がけで、日ごとにサポートメンバーが入れ替わりで参加して頂ける事となりました。お仕事終わりで駆け付けて下さる方や、学校の授業終わりで手伝いに来て下さった学生さん。本当に有難い事にこの映画祭のために時間と労力を提供して下さいました。

ちなみに、私はこのスクリーンには相当抵抗がありました。生地が透けるので、色抜けがしてしまうのです。映画制作者の気持ちを考えたら、絶対にNG！でしょう。

制約の中では、残念ながら他に代案を見出す事が出来ずで、本当に申し訳ない気持ちで一杯でした。そんな中、千葉県から授業終わりでサポートに来て下さった高校生の皆様が、少しでも良い状態で映画を観て頂けるようにと、皺を何度も確認しながら、一生懸命にこのスクリーンにアイロンをかけて下さっている姿を見て、心打たれる想いがありました。

人には見えないところで、ロシア映画制作者へのリスペクトの気持ちをこうした行為で表し、「繋がる」のだと…。そんな高校生の真っ直ぐな気持ちがとても有難く嬉しく思いました。

高校生の皆様は映画もしっかりと鑑賞して下さり、ティーンエイジャーの視点での素晴らしい映画の感想も頂きました。それを伝えるとロシア来日ゲストの皆様もとても喜んで下さいました。

☆・・☆

＜余談＞

会場が1日だけ、昼・夜と二枠お借りする事が出来る日がありました。

上映が夜からでしたので、昼間の空いた時間帯にロシアゲストの皆様へのおもてなしをしようという事になり、運営スタッフの素晴らしいネットワークをフル活用して頂き、会場に一流のとても素敵な茶道の先生をお招きして、茶道に纏わるとても奥深いお話しと、生け花やお茶たての実演などをご披露して頂き、お抹茶と和菓子を召し上がって頂きました。

ですが、和菓子は練り物でしたので、どうも練り物が苦手のようで、ロシアゲストの皆様のお口には合わないようでした。…残念！！

他、武道の師範の先生にも演じて頂き、大変好評を得ておりました。時間のない中で、おもてなし会にご協力を頂きました皆様には本当に感謝致します。

日本古来の文化に触れられたことにロシアゲストの皆様もご満足頂けたようでした。また、お土産をお持ち帰り頂きたいとの想いから、スタッフの中には徹夜で、着物の生地を使ってとても綺麗な小物入れを作って差し上げたり、私も知り合いに協力を得て、日本らしいアナログな卓上ゲームをプレゼントさせて頂きました。お土産文化も日本特有ですね。

☆・・☆

記者が少ししか来なかった！記者会見

●「繋がる」事の大切さを教えられた日

窮地に陥ると、救いの手は差し延べられる！という日がまさに起こりました。

その日は、セッティング作業の時間帯に参加出来る運営スタッフが小人数、しかもサポートの方もお一人と、上映時間までに作業が終わるのか？と、途方に暮れそうになった日でした。

スクリーン作業の担当と上映機材のセッティング、そして、一番やっかいなのが、会議用の長机を畳んで椅子を外して会場の両サイドに移動し、空いたスペースにスクリーンに対して弧を描くように椅子を並べる作業。時間との戦いであたふたしていた時に、小学生の男の子とお母様の親子連れのお客様が会場に入っていらっしゃいました。正直、もう開場の時間かと！焦りまくり、冷や汗が出ましたが、実は開場時間を間違えて1時間早くいらしたとの事でした。

まさか、この親子さんが救世主になるとは、この時は予想もしておりませんでした。

人手もなく、あたふたした現状を目の当たりにし、見かねたのだと思いますが、セッティング作業の手伝いを申し出て下さいました。「猫の手！も借りたい」状態でしたので即答お願いしました。ただ、机を畳んで移動する作業は、机の脚にあるストッパーを外す作業もあり、机で手を挟んだりしたら危険なので、小学6年生の男の子には無理だろうという事で、お母さんだけにお手伝いをして頂く事にしました。

ところが、男の子は小さい身体の特性を活かして、机の下に潜り込んで机のストッパーを次から次へと外し出したのです。大人の身体では、机の下に入り屈んでという動作は、とても負担が大きいので時間がかかるのです。彼のお蔭で机の移動がスムーズに出来、人手が少ないにも関わらず早く終える事が出来たのです。大人の考えでは、危ないからこれはダメ！あれはしたらいけない！とか、子どもの無限の可能性を確かめずに阻止してしまいますが、子どもは子どもの目線で出来る事を見つける！チカラがあるのだと、映画祭の準備段階の中で教えられる事もある！と感心しました。

その後も、彼はスクリーンを中心として弧を描くように椅子を配置し、どの席からもスクリーンが見えるようにする！という、大人が苦手な領域をマジックのように並べる作業をいとも簡単に！こなしてしまったのです。その日から「スーパー小学生」として、毎日サポートに駆けつけてくれました。本当に助かりました。

この日の出会いがきっかけとなり第 2 回目も親子でサポートして下さる事になり、第 3 回目では、実はお母様は恩田扶美さん、グラフィックデザイナーであり、「第 3 回ロシア映画祭 in 東京」のチラシとパンフレットのデザイナーとして、息子さんは恩田晴君、

この春で中学 3 年生になり、今ではマイクランナーとしてのポジションを持ち、強力なサポートメンバーとして3年連続参加して頂いております。

あの日、あの時、1時間時間を間違えてご来場頂かなければ、このような繋がりには発展していないと思うと出会いのタイミングはとてもミラクルだと感慨深い思いです。

映画祭とは、作品の鑑賞をする事だけに留まらずに、バックグラウンドでは、こうして世代を越えてチカラを合わせて、人と人が「繋がる」事にも大きな意味を持つのではないか！と改めて思う次第です。私が幼い頃にオルゴールから流れる曲でロシアに興味を持ち繋がっていった様に、晴君もまた、ロシア文化に興味を持ち、リアルなロシアとロシア映画祭を通して繋がり、日露友好の架け橋となって未来永劫の関係性を繋いでいく！担い手となって頂けるのでは？と、期待しています。

そして、「スーパー小学生」だった晴君が成人し、いつの日かロシア映画祭の運営メンバーの中心となって、壇上にて司会進行をする日が来る事を願っています。

未来ある若者達にしっかりとバトンを渡せるようにさらに襟を正して、心して取り組まなければと改めて思いました。

この章の最後となりましたが、「第一回目のロシア映画祭 in 東京」をお伝えするにあたり、ロシア側の影の功労者として、毎年日本語通訳として来日されていらっしゃる！ドミトリー・トカチェンコさんの事をお伝えさせて頂きます。

ドミトリーさんは、現在はモスクワでイベント企画や旅行業などの事業を手掛けていらっしゃいます。以前は、日本の旅行社で働いていたキャリアもお持ちで、とても親日家で日本語や日本国内にも明るいため、ロシア側代表のセルゲイ氏からの絶大な信頼があります。

ロシア映画祭を日本で開催するにあたり、日本側との重要な架け橋となって頂いている方です。ロシア人というよりは、とても親しみやすく日本人に気質が似てらして、まじめで責任感が強く、日露の友好のためならと惜しみなくご尽力を頂ける方です。

通訳者としての役割はもとより、開催前の準備や技術的なやり取りに留まらず、来日ゲストのオフの日には一緒に観光にお付き合いしたりと、実に幅広くサポートの出来る！とても有能な方です。毎回、来日ゲストの皆様よりも数日前に、ロシア側のテクニカルディレクターと共に来日されます。

ドミトリーさんと初めてお会いした時の事を今でも覚えておりますが、私は、最初にお会いするロシア側のスタッフという事でとても緊張していたのですが、日本語で話された瞬間にすぐに打ち解ける事が出来ました。

そもそも、ロシア映画祭を日本で開催するにあたり、ドミトリーさんからJICの伏田さんに相談した事から始まっているので、ご本人としては、開催に対してはロシア側としての重責をとても感じているようでした。その重責感と一生懸命さがひしひしと伝わり、私達も身を引き締めて取り組まなければと思った次第です。

ここでリアルな事実をお伝えする為に、ドミトリーさんから当時(第一回目の初日)に頂いたメールの一部を公開させて頂きます。

「率直に言えば、私が今日一番心配なのは、ロシア側と日本のチームとのコミュニケーションです。事前に会ったこともなく打ち合わせなどもしないで本番の直前に現場で会ってすぐに行動することなので、うまくいくかな、ちょっと心配ですね。でも、私はできる範囲で努力します。」

＊ロシア代表セルゲイ氏率いるロシアゲストの皆様は、来日前に中国にてロシア映画祭を開催していたため、事前打合せする時間がない！状況でした。

「通訳は私の仕事なので、毎日いろんな質問してください。映画祭を成功させるために、できる範囲で頑張ります」

＊そのお言葉通りで、まさに！24 時間？フル回転で通訳をしていただきました。

お蔭で、ロシアゲストの皆様とのコミュニケーションも上手くいき、無事に映画祭を開催する事が出来ました。

そして、ドミトリーさんの想いとは…「…政治とは別に、一般的なロシア人と日本人がお互いにもっと理解すればするほど、平和の保証になることであると確信しております。…」

私も同じ想いです。映画祭の役割の一つには、お互いの文化を理解する事から、両国の、ひいては世界の平和へと繋いでいく事！でもあると…。

☆・・☆

＜余談＞

第一回ロシア映画祭のゲストの方から映画祭後に頂いたメールが見つかりましたのでお届けします！

「Спасибо за гостеприимство. Прекрасная страна, Япония! Прекрасные люди! Я почувствовал вашу любовь! Я воодушевлен и с нетерпением приступаю к работе!」

？どんなお言葉を頂戴したのでしょうか？ここはあえて日本語訳は、載せずにおきますね。

☆・・☆

＜第 2 章＞「第 2 回ロシア映画祭 in 東京」手作りの映画祭！！を続けるべきか？～へ続く･･･。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

(後記)

＊本原稿の入稿時点において、7 都府県を対象地域とする緊急事態宣言が発令されました。

感染の影響を受けてしまわれた皆様におかれましては、心よりお見舞い申し上げますと共に受けてない皆様もくれぐれもご自愛くださいませ。この先少なくとも 1 か月、私たちの生活・行動は大きく制限されます。このような困難な時代だからこそ、「人との繋がり」の大切さを実感しております。

ロシア映画祭の記事執筆にあたり、今回は「人」にフォーカスさせて頂きました。普段は表には出てこない人達に、陰ながら支えて頂いている！ことをお伝えしたかったのです。

これは、本映画祭に限ったことではなく、この度のような緊急事態の時に私達のライフラインを止めないようにとリスクを負って働いて下さる方々がいらっしゃる事！その陰ながら支えて下さる方々がいるからこそ、私達は活かされている！

普段、表には出ていらっしゃらない陰ながらの功労者！

全ての皆様への敬意と感謝の意を込めて…。

2019 年 11 月 24 日、京都のレストラン「キエフ」主催のロシア研究会で、天理大学の五十嵐徳子教授による「現代ロシア人の生活と意識について」と題した講演が行われました。ソ連解体後 25 年間にわたって続けて来られた現地聞き取り調査を踏まえて、ロシアの女性たちの生活意識を「らしさ」という切り口で分析したお話は、ロシアセミナー貝澤教授の講演内容ともクロスして、今のロシアを知る格好の手がかりを提供しています。

以下、その講演録をお届けします(文責;編集部)。

現代ロシア人の生活と意識について

五十嵐　徳子（天理大学国際学部教授）

今日は「現代ロシア人の生活と意識について」というテーマをいただいております。私はここ 10 年くらいロシア人の生活意識というものを研究しているのですが、実はロシアの少子高齢化問題、特に高齢化の問題を、現地調査を含めて集中的に研究しています(注 1)。今日はそれと関係が無いわけではないですが、私がなぜロシア人の生活とか意識に興味を持つようになったのかということを、少し過去にもどって紹介しながらお話ししたいと思います。

注 1：高齢者介護に特化して 10 年くらいです。意識調査は博士論文の時からですから 25 年くらいになります。

Ⅰ．ロシアとの個人史的関わり

1985 年～初めてのソ連（ロシア）訪問

1985 年に初めてソ連に行きました。横浜からバイカル号というソ連船に乗って、まる 2 日かけてナホトカに着きました。ロシア語研修がついた 1 ヶ月間のソ連旅行でした。ナホトカで上陸して、列車でハバロフスクへ移動、国内線で当時のレニングラード（現、サンクトペテルブルグ）へ飛びました。レニングラードで 2 週間ロシア語を勉強して、エストニアのタリンやウクライナのキエフを廻って、最後はまた国内線でモスクワからハバロフスクに飛び、そこから新潟へ帰ってきた。これが私とロシア（旧ソ連）との最初の出会いになったわけです。

その後、1987 年から 88 年にかけて、レニングラード大学に個人で 1 年間留学をしました。当時、レニングラードには、日本領事館の職員か会社派遣で勉強に来ている商社員しか日本人はいなくて、まして女性は領事館員の妻しかいなくて、普通の女性は私だけでした。私が Korablestrotelej 通りにあるレニングラード大学の学生寮に初めて入った日本人学生でした。旧ソ連諸国から来ている学生や東欧出身の学生たちと、1 年間もうどっぷりロシア語だけの生活を体験しました。

留学後は大阪大学の大学院に入って、藤本和貴夫先生の下で勉強しました。最初は日露の機械翻訳という工学系の研究をしていまして、博士課程に入って初めてロシアの社会研究をすることになりました。日本では研究者はあんまり研究テーマを変えないんですが、アメリカだと結構あるんですけども、私の場合は大きくテーマを変えて元々やりたかった社会研究をすることになっていきました。

1991 年～ソ連崩壊時に 1 年間研究留学

1991 年の 9 月から国費留学でウラル大学に留学することが決まっていたのですが、ご存知のように 91 年 8 月にクーデター騒ぎがありました。ゴルバチョフがクリミアの別荘で軟禁された事件ですね。留学先の国がどうなるか分からないというので「待った」がかかった。クーデターで日本の文部省も混乱したわけです。それで、私は「もう待っていられない」、「自分で勝手に行く」と言って、レニングラード教育大学と掛け合って、レニングラードにもう一度 1 年間留学しました。ウラルには行きたくなかったんですね。やっぱりレニングラードへ行きたかった。これが大学院博士課程の時ですが、91 年の 11 月ぐらいに向こうに行きましたから、ソ連解体の 1 カ月前です。ソ連邦はこの年の 12 月に解体します。ソ連が解体する過程、そして解体後に新しくなったロシア社会の変化を、実際に自分の目で見て体験することになりました。これが私の研究生活に非常に大きな影響を与えたと思います。

「100 ルーブルよりも 100 人の友達」

1991 年から 92 年当時のロシアはまだ配給制でした。私達留学生も学生課に行って、卵○個とか、肉の缶詰○個とか、タバコ○ケースとか、配給券をもらうのです。しかし、それで

商品が手に入るわけではなくて、配給券で商品を売ってる店を探して買わないといけない。売ってないんですよ、物不足で。どの店にも商品がない。で、どうしたかと言うと、ロシアの友人たちが「その配給券で、自分たちがもらってきてあげる」と言って、親の職場とかツテを頼っていろんな所で商品に替えて、もらって来てくれるのです。ロシアの諺に「100 ルーブル持つよりも、100 人の友達を持て」というのがありますが、本当にその通りだなと思いました。この非常に大変な時に、ロシア人達はとにかく助け合って生きている。それを現地で一緒に体験しました。

1991 年 12 月 25 日、ゴルバチョフ大統領が辞任演説をして、ソ連邦は解体してしまいました。その後、新生ロシアになってから、私は毎年 2 回か 3 回、ロシアを中心に旧ソ連、旧東欧に出かけて現地調査をするようになりました。

「現場を見ないと分からない」。これは当時、神戸大学の大津定美先生が私におっしゃった言葉です。「現場にいる人が一番の研究者だ」、「これだけ移行期で混乱している中で、まさにあなたが見てこないといけないんだ」と、励ましていただきました。本当にその言葉通りに、いまだに年に 2、3 回はロシアに行って、現地調査をするという生活を送っています。

現地調査でロシア社会を観察

写真は、92 年 1 月 28 日のネフスキー大通りです(注 2)。ソ連時代のドゥブリョフカという重いコートを着て、沢山の人が商店に並んでいるところです。私も並びました。当時の日記を読むと、「パンを買うのに今日は 40 分かかった」とか書いています。宮殿広場ではしょっちゅうデモが起こっていました。旧共産党系の人たちのデモですね。ものすごいインフレで、経済は大混乱です。ロシアのルーブル通貨は暴落しました。ただ、外国人は円とかドルとか外貨を持っているので、逆にお金持ちになれた。こんな機会は使わないと損だというので、私は 92 年の 1 月から春までの間に、ロシアだけでなくバルト三国や中央アジアなど、あちこちに行きました。例えばウズベキスタンのタシケントまで飛行機で行っても 1 回 500 円くらいの運賃で、ものすごく安かったわけです。

注 2：カメラは日本時間の設定のままだったので写真は 1 月 29 日となっています。

92 年当時のモスクワやタリンの写真を見ると、街の様子はまだソ連そのままです。今は、モスクワのクレムリン周辺でもタリンの旧市街でも、素敵な店がいっぱいあって、もう観光客だらけですけれど、当時はソ連解体直後の混乱期の始まりという感じでした。タシケントの店で買い物をしても、使っていたのはまだソ連のルーブルですからね。社会の仕組みも人の意識もまだまだソ連なんですよ。で、あちこち行って、現地の人にいろいろ聞いてみました。「ソ連解体しましたけど、どうですか？」って言うと、旧ソ連の人たちは一様に、「まぁ、またそのうち元に戻るよ」なんて言って、楽観的な雰囲気が解体直後にはありました。

子連れで現地フィールドワーク

留学から帰り、大学院を卒業して、その後就職もするのですが、私の人生も変わります。結婚して子どもも生まれる。そうすると、ロシア研究で毎年ロシアに行っていると先ほど言いましたけれども、「このまま続けられるか？」「子ども連れて行けるのか？」ということにもなります。私の親は「子ども置いて行ったらいいよ」と言ってくれていたのですが、だんだんと子ども連れて行くようになりまして、子どもをロシア人の友達に預けて、私はインタビューに出かけたり、調査に出かけたりしました。そのうちに、もう一人生まれると、二人とも連れて行く。夫と一緒に行くこともありました。とにかく、子連れでも何でもいいから行きたい、研究したいということで、続けてきました。

ロシア人の友人で、レーナという、私が子連れで行くといつもベビーシッターをやってくれて、今でも親しくつきあっている女性がいるのですが、随分面倒を見てもらいました。上の子どもが 10 ヶ月くらいの時から、高校生近くになるまで連れて行ってました。当時はもう大変でしたが、逆に、子どもと行ったから分かるロシア、子どもといるから感じるロシアの生活というものを見ることができた。そのことが私の今の研究の土台になっているのではないかと思います。

人生の『らしさ』を求めるロシア人

こんなふうな私の経験があって、子どもと一緒にロシアに行く中で、ではロシアの女性はどんな生活をしているのかということが見えてきました。

ソ連時代から、またロシアになってからもそうですが、ロシアでは女性も男性と同様に外で仕事をもって働いています。が、家のこと（家事、育児、介護など）をしているのは圧倒的に女性です。

ロシアというのは、私は、『らしさ』をすごく求める社会ではないかと思います。「『らしさ』を求めるロシア社会」というのが最近考えているテーマで、ロシア人というのは、例えば「女性らしさ」とか「男性らしさ」、「子どもらしさ」といった、人生の『らしさ』を求める人たちではないか。

ロシアや旧ソ連に関わる多くの研究者は、ロシアの研究者や知り合いから、「結婚してるのか？」とか「子どもはいるのか？」とか、一度ならず訊かれたことがあると思います。子どもがいるとなると、「2 人目はどうだ？」、「子どもに彼女（彼）はできたか？」、「子どもはいつ結婚するのか？」等々、とにかくず～っと訊いてくる。私が若い頃、「結婚していない」と答えると、「早く結婚しなさい」、「結婚して、子どもを産んで、それが女性の幸せだよ」と、本当に無邪気に言ってくる。こんなことがよくあります。

どうも彼らは、人生の『らしさ』へのこだわりが非常に強い人たちのようです。私のごく狭い経験からではありますが、ロシアはどうも『らしさ』を求める社会ではないかと感じています。

Ⅱ. ロシア人の生活と意識～ジェンダー状況を中心に

そこで、ロシアの人々の日常生活や、労働や家族に対する意識や見方に焦点を当てて、そこから『らしさ』を求めるロシアを炙り出せないかと考えました。具体的には、①性別役割分担の現実と意識に見る『らしさ』、②見かけの『らしさ』、この 2 つに注目して分析してみました。これを私自身の調査や国際調査の結果などを使って少し考えてみたいと思います。

ロシアでは女性が働くのは当たり前

ソ連時代が男女平等の社会だったかどうかという議論は別として、ソ連時代に女性も労働力として動員され、就労していたことは事実です。日本でも多くの女性が就労していますが、日本の場合、結婚して子どもを産むときに仕事を一旦やめて家庭に入り、子どもが大きくなってから再び働きだすことが多い。日本の女性の年齢別就業率をグラフにすると M 字型で、女性が出産と育児をする時期に、一時的に真ん中が凹みます。ところが、ソ連・ロシアはそうではなく、年齢別就業率のグラフは台形型を描きます。つまり、ロシアの女性は、結婚しても、子どもを産んでも、ず～と働いている。これはソ連時代には当たり前でしたし、現在のロシアでも実はまったく変わりません。全就業者に占める女性の割合はソ連時代末期の 1991 年で 51%でした。現在のロシアでも 49%（2015 年）です。女性の就業率はソ連解体後一時的に少し下がったのですが、その後はほぼソ連時代と同じレベルに戻っています。ちなみに専業主婦はロシアにいるのかというと、ロシアの成年女性の専業主婦率は2017年のデータで4.8%です。非常に少ない。ロシアの女性にとっては、男性だから働くとか、女性だから働かないといった意識は無いものと思われます。

ロシアの女性は家事をやるのも当たり前

ここで結論を先取りして言いますと、ロシアでは男女共に働くことは『らしさ』であるが、家事、育児は女性が主にすることが『らしさ』であって、さらにその事に不満を持つ女性は非常に少ないということです。女性が家事をやるのは当たり前だという受け止め方が、男性だけではなくロシアでは女性にもあるわけです。

データを少し見てみましょう。

表 1 は 1997 年に私が調査した結果です。女性がほとんどの家事育児をしています。男性は「ゴミ捨て」だけが 50%を超えていますが、それ以外は女性が男性よりもはるかに多く家事をやっています。これは 20 年以上前の調査ですが、今も基本的に全く変わっていません。

表 1　ロシアの男性、女性が実際にしている家事
複数回答（%）1997 年調査

	食事	洗濯	掃除	子ども散歩	子ども教育	買い物	ゴミ捨て	家計計画
男性	33	27	42	23	31	46	58	47
女性	76	73	76	37	49	63	44	57

表 2　「男性の仕事は収入を得ることで、女性の仕事は家庭と家族の面倒を見ることだ」（%）

	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらとも言えない	どちらかと言えばそう思わない	思わない
ロシア	22.9	32.0	27.6	15.8	1.8
フィリピン	48.8	31.5	7.6	10.1	2.0
日本	7.9	16.5	25.4	13.3	36.9

表 2 は、国際社会調査プログラム（ISSP）という国際調査機関の2012年の調査結果ですが、「男性の仕事は収入を得ることで、女性の仕事は家庭と家族の面倒を見ることだ」という考えをどう思うかという問いへの回答です。

この調査の参加国は 30 カ国以上ですが、「そう思う」が一番多かったのはフィリピンです。フィリピンが「男性＝仕事、女性＝家庭」という考えに賛成する人が一番多い。最近、フィリピンの人と話す機会があって聞いてみると、「確かにそうだ」と言うんですね。「フィリピンは貧しいから働かないと生活できないので、私たち女性も働いてるよ。でも理想はそうなのよ。」と言うわけです。フィリピンほどではないけれど、ロシアも約 55%が「女性は家庭」に賛成しています。ロシアの女性も「男性＝仕事、女性＝家庭」という考えに賛成する人が多いのです。

日本はそんなに多くない。日本は「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」合わせて 25%しかありません。日本の女性はもう「男性＝仕事、女性＝家庭」だと思わなくなってきているのがわかります。

家事負担をあまり不公平に感じていないロシアの女性たち

同じ ISSP の調査に、有給休暇についての質問項目があります。「共働きのカップルが同じような労働条件や待遇で働いていて、2 人とも有給休暇を取得できるとしたら、その取得期間を母親と父親の間でどのように分けるのが良いと思うか」という質問です。これに対して、「母親がすべての期間を休み、父親は休まない」と回答した人がロシアで 81%もありました。これは調査国中で最多の数字でした。

女性も仕事はするけれども、どちらが主な働き手であるかといえば男性であり、家庭のことをするのは女性であるという意識がここに伺えます。

しかし、家事をするのはどちらかといえば女性であるという意識はロシア特有のことではなくて、家事は女性がするという傾向はどの国でも圧倒的に多い。これは事実ですけれども、多くの国では、このことを女性は不公平だと思っている。「あなたもやってよ！ 半分半分でしょ。私も働いてるのよ！」というわけです。

ところが、ロシアではあんまりそうならない。ロシアの女性はそれほど不公平だと思っていないのです。家事分担の公平感の男女差でロシアは 23 位です。これは、男女平等が進んでいて男性の家事・育児参加率が高い北欧諸国とだいたい同じレベルです。北欧諸国の男性の家事参加率はすごく高い。だけど北欧の女性はそれほど満足していない。ロシアの男性はあんまり家事をしないにも関わらず、ロシアの女性は北欧の女性と同じ程度に満足している。つまり、ロシアの女性は負担を負担であるとみなしていない状況にあるのですね。

ちなみに、この調査では日本の女性が不公平と感じる割合が調査国中で最も高かった。男性の皆さん、こういう調査結果が出ていますので、少し考えていただいた方がいいと思います（笑）。

インタビュー調査より抜粋

2008 年～2018 年に私が行った聞き取り調査からいくつかご紹介します。ロシアの女性はこんなことを言うんですよね。

「女性が家事育児を主に行うことは普通だと思います。私も働いていますが、家事をするのは嫌じゃないです」

「家事はこれといって時間がかかりませんし平気ですが、できればもう少し夫が子どもの教育に関わってくれればいいと思います」

「私の個人的な意見ですが、病人や老人の面倒は女性がするべきだと思います。ただ、母親の介護をしている男性を 2 人知ってますけどね」（男性で介護をする人が非常に少ないことを言っている）

「私は 2 つの幼稚園の園長ですが、家事も育児も女性の仕事ですから私がしています。これは当たり前のことです。そして私には喜びです」

女性にばかり聞いていたので、男性にも少し聞いてみました。

「電気工事士として土日も仕事をしています。妻ももちろん仕事をしていて、家事を手伝うことも……」

私はまずここで引っかかりました。「手伝うじゃないでしょ！」と私なんか思うのですが、「……手伝うこともあるけど、あくまで家事、育児は女性が主にするものです。僕の方が稼ぎもいいから、自然なことだと思う」。これが男性の回答です。

年金年齢の引き上げ議論に見る「女性の役割」

ロシアの場合、男女共に「家事は女性がするのが当たり前」という意識が非常に強いわけです。これは、おそらく一般市民がそう思っているだけではなくて、国の制度そのものがこういう考えの下に構築されている面があると思います。例えばロシアの年金年齢は女性 55 歳、男性 60 歳です。これはソ連時代から 5 歳の差があった。男性は 60 歳から年金がもらえるのに対して、女性は 55 歳からもらえる。何故かと言うと、女性は家事育児をしているからということだったのです。

ところが、2018 年の夏にロシアの年金改革が議論され、年金受給年齢の引き上げが決定されました。これに対して年金年齢の引き上げに反対するデモがあちこちで起こった。当初は男女とも一律 63 歳に引き上げるという案だったんですね。男性は 3 歳引き上げ、女性は 8 歳も引き上げる案だった。そうすると、政権を揺るがすような反対運動が起こったわけです。

ついにプーチン大統領が出てきて釈明することになります。2018 年 8 月 29 日の「プーチン大統領の年金年齢引き上げに関する国民への説明」というのがあるのですが、「女性の年金年齢を 63 歳に引き上げるのは間違いです」と言った。「女性が仕事をしながら家庭のこと全て、家族への気遣い、子供の教育、孫の世話を担っている。年金年齢を 8 歳ではなく 5 歳引き上げで 60 歳にしなければならない」と言って、何とか幕引きを図ろうとしたわけです。この説明は、女性が家事労働の多くを担っているという現状の救済にはなりますが、そもそも女性が家事、育児をすることが前提になっていることを示しています。ですから、ロシアではソ連時代から、別に人々の意識だけではなく国そのものが、「女性が家事、育児、介護をする」という前提で年金制度を組み立ててきたということなのです。

結婚、子どもを持つことは『らしさ』なのか？

さきほど、ロシア人はよく「結婚してるか？」とか「子どもはいるか？」とか訊いてくると言いました。ここから、私は「ロシアでは結婚、子どもを持つことが『らしさ』なのではないか」という仮説を立てています。

「結婚している人と結婚してない人とどちらが幸せと思うか？」という ISSP の国際調査があるのですが、「結婚して

いる人の方がしていない人より大体は幸せである」と、結婚を肯定的に答える人の割合が最も高いのがロシアなのです。「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」という回答を選択した人が 70.4%もいる。

ちなみに日本は 29.8%です。つまり、日本人は結婚への幻想もなく、結婚が人生の『らしさ』ではなくなってきているようです。日本人の場合、結婚イコール幸せという風には思わなくなって来ている。確かに日本の男性の家事、育児への参加率を考えれば、特に女性の中ではこの傾向はうなずけるものであると私は思います。

子どもを持つと親の社会的信用度が高くなる？

では、子どもを持つことは『らしさ』なのか？ ISSP の調査では、「子どもを持つと親の社会的信用度が高くなると思うか」という質問に対して、肯定的に答えた人がロシアの場合 74.2%です（日本は 40.9%）。つまり、子どもを持つことが親の社会的信用度を高めるとロシア人は思っている。あるいは、社会的信用度というよりも、ロシアでは子どもを持つ事が当たり前と見られているようです。

例えば、私が聞き取り調査をしていると、こちらが訊くばかりではなくて、相手も訊いてくるわけです。「ところで、あなた幾つなの？」、「結婚してるの？」、「子どもはいるの？」、…と訊いてくる。それで、「うん、子どもいるよ」と言うと、「えっ、何人？」、「幾つと幾つ？」と返ってくる。そこから調査がすごくし易くなる。これは何度も感じます。子どもがいると答えると、インタビューをする距離感が非常に縮まって、話がはずんでいきます。そういう意味では、私も子どもがいることで社会的信用度が高くなったのかなと思います。

ロシアにおける見かけの『らしさ』

次は、見かけの『らしさ』についてです。家庭や結婚の中に見るロシアの『らしさ』とともに、もう一つ私が最近興味を持っているのは、見かけの『らしさ』です。服装に見る『らしさ』というものから、ソ連、ロシアを見てみようと考えています。

歴史的に見ると、ロシアでは、ソ連時代に女性も男性と同様に労働力として動員されていました。女性がトロリーバスの運転手をしていたり、トラクターに乗っていたりというようなソ連時代の写真がたくさんあります。しかしよく見ると、ソ連時代の女性の服装は労働者や農民であってもズボンをはくのではなくスカートをはくことが主流で、それはソ連が解体してもしばらくはあまり変わりませんでした。

1990 年代にロシアに行って調査をしていると、「女性は女性らしくスカートがいいのよ」とか、「あなたはなぜジーンズやパンツばかりなの？スカートのほうがエレガントよ」、とよく言われました。

ジェンダー研究をしていて、「スカートを履いた労働者」というのが私のロシア人女性のイメージでした。

東京大学の瀬地山角さんという東アジア家父長制の研究者が、北朝鮮についての印象を「スカートをはいた社会主義」という内容のコラムに書いています。「街をゆく女性たちは、判で押したように皆スカートをはいている。ズボンをはいた女性は、農作業をしている人たちなどごく一部で、町中ではほとんど見かけない。…（中略）…、街をゆくスカートは、単なる外見にとどまらず、社会主義の基層に残った男女の区別を色濃く反映しているように思われた」

これは、ソ連時代とソ連解体直後のロシアの女性労働者に私が感じていたイメージと全く同じでした。それは、中国の人民服と全く違うイメージです。女性は女性らしくというか、カッコ付きですが、「見かけの女性らしさ」をソ連時代のロシアは非常に意識をしていたと思います。

「スカートを履いた労働者」

1950 年代のソビエトのファッション誌を見ると、労働現場で着る服のデザインが載っています。ソビエト時代には服が自由に買えなかったので、型紙が必ず付いていた。この型紙を見て自分で作業服なんかも作っていたんですね。で、見たら分かるように、労働着もスカートなのです。スカートの紙型ばっかりです。

1960 年代のファッション誌でも、ズボンが載っているのはものすごく少なくて、見つけるのが大変です。部屋着のモデルがパンツをはいているのをやっと見つけました。

ブラウスを紹介したページでは、ブラウスに合うスカートというのはあるのですが、やはりズボンは見当たらない。50 年代、60 年代から 70 年代も圧倒的にスカートばっかりで、ズボンというのは女性にとって非常にラフな服装だと見なされていたのです。

1970 年代の雑誌で、職場や学校へ着ていく服ということでワンピースがあって、そのとなりにパンツを見つけました。これは若者のスポーツ服として型紙付きで載っています。70 年代ぐらいになるとやっと、「スポーツをするときにはスカートではなくてパンツだ」というのが出てくる。80 年代の雑誌でも、乗馬とかスポーツウェアでパンツが紹介されています。ただし、コメントがついていまして、スポーツウェアなんだけれども、女性らしさとか、上品な感じを求めるというようなことが書いてあるんですね。

ロシア人女性は身体にフィットした服が好み

1990 年代以降は、私自身が実際にロシアに行って見ていますし、ファッション雑誌もたくさん買い集めています。これは私の体験からですが、ロシア人女性は、いわゆる A ラインではなく、身体にフィットした服が好みではないかと思います。

A ラインの服というのは、上半身が細くてすそ広がりとな

った形、A 字型のシルエットですね。体型隠しというのかも知れませんが、1955 年にクリスチャン・ディオールが最初に発表し、その後世界に広まったシルエットです。日本人は A ラインが好きなんですが、ロシア人はピッタリと身体にフィットした洋服が好きで、劇場に行くときも、ヒールを履いて、颯爽と出かけていく。

毎年ロシアに調査に行きますが、実は若いころ、私はロシアに「出張用アイテム」というのをちゃんと置いていました。どんなアイテムだったかと言うと、ボディにピッタリするような服とヒールです。おそらく私自身がロシアを内面化していたんでしょうね。ロシアで調査をする時に、「いいね、その服！」「女っぽいね」って言われたかったんでしょうね。私はもともとは、A ラインの服とか、色は黒でユニセックスなものが好きなんですけれども、日本の格好とロシアの格好と二パターンあって、ロシアではいわゆるカッコ付き「女らしい服装」で調査をしていたというようなことがあったわけです。

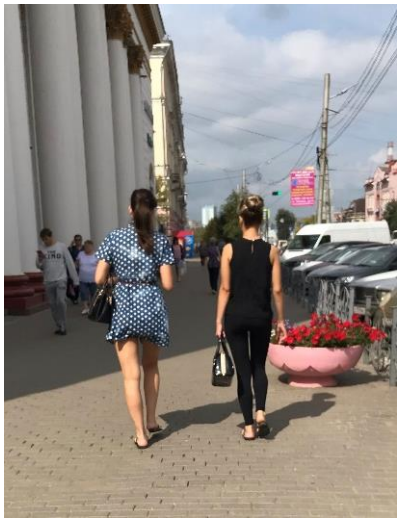
美にどん欲なロシア人

皆さんを含めて多くの方々がロシアの女性をとても綺麗だと言います。確かにロシア人は綺麗ですよね。私は、ロシア人は装うことが非常に好きだなと思います。2014 年のデータですが、ロシア人女性は化粧品に給与の 30%を使っているという数字があります。フランスやイギリスの女性は 5%、ドイツの女性は 4%という数字もあって、ロシア人が美に対してお金を惜しまない様子が伺えます。

また、ロシアでは、ここ 10 年ぐらいビューティーサロンやネイルサロンがあっちこっちにできて、よく流行っています。日本でもマニキュアとかペディキュアの店がありますけれども、ロシア人は本当に好きですね。写真は、高級マンションの 1 階に最近出来たネイルサロンです。結構、高そうです。もう一つは、昔からある化粧品屋。看板に「ペディキュア 1,190 ルーブルから」と書いてある。1 ルーブル＝1.6 円くらいなので、2000 円もしないですね。салон красоты, beauty salon とある美容院では、「セールです。髪のカット、眉毛もカットします。マニキュア、ジェルも何でもやりますよ。」とか書いてあったのですが、とにかくあちこちに沢山あります。

パンツブームの中でも女性らしい服装が好まれる

ロシア人は身体にフィットした服が好きだと言いましたが、2000 年代になってからはさすがにパンツブームで、最近はみんなパンツを履いています。でもロシア人はぶかぶかのパンツはあんまり履かない。



最近は前から写真を撮ると文句を言われるので、後ろからストーカーみたいについて行ってパシャ、パシャとやるんですが (笑)、これはイワノボという繊維の街で今年撮った写真です。やっぱり細いパンツを履いていて、上もピチッとした、ボディラインのはっきりしたものをみんな着ています。ペテルブルグやモスクワでも細いパンツを履いています。

昨年、フィギュアスケートのザギトワ選手が日本に来てバラエティー番組に出た時に、日本でよく見るぶかぶかのパンツを履いていて、彼女が「これ日本で買った」、「日本ではみんなこんなの履いてて、ロシアにはなくてすごく珍しいので買っちゃった。」とか言っていました。つまり、ロシアでは同じパンツルックでも、やっぱり女性らしい服、エレガントで身体にぴったり合った服、これが好きなんじゃないかと思います。

足元ではハイヒール

今年の夏はハバロフスクに出張しました。写真は、国際会議の最中に、自分の発表が無いのを良いことに足元を撮ったものです (笑)。女性たちはすごく高いヒール、10 センチヒールを履いています。よく平気だなと思うのですが、ロシアの女性にとっては、こういうところに来る時は、10 センチくらいのヒールを履くのが当たり前なわけですね。もちろん、普通の靴を履いてる人もいますよ。でも、やはり劇場とか、レストランとか、国際会議とか、こういうところに行くときは高いのを履く。やっぱりロシアの女性は、高いヒールを履いたり、ボディにピッタリとしたものを着る。これが「女性らしい」服装なんだということなのです。

同性愛をタブー視するロシア人

ではさらに、その『らしさ』、女性らしさ、男性らしさということが、最近のロシアにおいて、同性愛への見方や考え方にどう反映しているのか。女性らしさ、男性らしさを大切にする人たちは、同性愛に対してどういうふうに見ているでしょうか。

ロシアでは同性愛を非常にタブー視する雰囲気が強いです。2013 年 6 月にいわゆる「同性愛宣伝禁止法」が成立しました。どんな法律かと言うと、未成年の子どもに「伝統的ではない家族観」とか「伝統的ではない恋愛」の宣伝を禁止するという法律です。違反すると罰金になります。ロシアでは、いわゆる女性らしさ、男性らしさから逸脱している同性愛に関しては否定的な見方をする人が伝統的に多いのですが、この法律が出来たことによってさらにそれが強まった。ロシア世論調査センター「レバダセンター」の調査では、「同性愛は容認できない」と答えた人の割合が、1998 年の 68%から 2017 年の調査では 83%にも増えています。世界的な趨勢として同性婚を認めるとか、パートナーシップを認めるという流れが大きくなっている中で、ロシアはかなり逆行しているように見えます。これが今のロシアの社会なわけですね。

ISSP の調査でも、「女性同士のカップルや男性同士のカップルの子育てについてあなたどう思いますか？」という質問が世界 50 数か国の人を対象に行われているのですが、ロシアでは 8 割以上が同性カップルが子どもを育てることに反対しています。これは他の国に比べるとかなり目立っています。同性愛をタブー視する傾向が非常に強いという結果が出ています。

「らしさ」という規範の強さが反映？

これはなぜなのか？ソビエト時代には同性愛は刑法上の犯罪でした。有名人たちにも同性愛を理由に長く刑務所に入れられた人が沢山います。そういった歴史的要因も作用していると思います。

ほかにも、プーチンは強権だから、政権への恐怖からみんな「同性愛よくない」と言ってるのか、それとも教育なのか……。実はロシアでは性教育はやっていません。一時的に性教育があったことはあるのですが、基本的には性教育をやっていない。ですから、教育の問題で、情報が少ないからなのかということも考えられます。

いろいろな要因があって、私は今ここでこれを検証するつもりはありませんが、やっぱりロシア人の中にある「男らしさ」、「女らしさ」という規範の強さ、こういうものが同性愛をタブー視する見方に繋がっているのではないかと、現地調査をする中で感じています。このような態度は、政権から押し付けられているだけでなく、今のところ多くのロシア人の中に内面化されているように、私には感じられます。

今年日本でも上映された「ホワイト・クロウ　伝説のダンサー」という映画があります。キーロフ・バレエの団員だったルドルフ・ヌレエフの生涯を描いた作品です。彼は 1961 年にパリでの海外公演の時にフランスに亡命しました。当時のソ連では「人民の敵」と呼ばれたわけですが、ただそのバレエ技術は非常に素晴らしいということで、世界でもソ連・ロシアでも非常に高く評価されています。しかし、ヌレエフは実は同性愛者で、最後はエイズで亡くなるのです。

ロシアでは最近、彼の生誕を祝う催しがあって、テレビ番組が作られたりしたのですが、2016 年に作られた番組を YouTube で見ると、「彼はダンサーとしてとても素晴らしい。でも残念です。彼は同性愛者で、エイズで死んでしまったから。」というような内容なんですね。彼のバレエ技術は褒めても、彼のいわゆる性向、同性愛者であったということをものすごく悪く言う番組に仕上がっている。

ロシアにも同性愛者はもちろんいるわけです。しかし、彼らに対してロシア社会は非常に厳しい見方をしています。これは、ロシア人の中にある伝統的な「男らしさ」とか「女らしさ」という考え方が影響を与えているのではないかと、私は最近考えています。

（2019 年 11 月 24 日／レストラン「キエフ」主催ロシア研究会にて）

ベルリン国際映画祭銀熊賞受賞

映画「ドヴラートフ」

DOVLATOV

アレクセイ・ゲルマン・ジュニア監督

4月25日(土)～渋谷・ユーロスペースほか、全国順次公開

20世紀で最も輝かしいロシア人作家の一人と言われるセルゲイ・ドヴラートフの激動の半生を追う。1971年のソビエト・レニングラード(現ペテルブルグ)で、ジャーナリストとして働きながら文筆活動にいそしんだ日々。「雪解け」と呼ばれて言論に自由な風が吹いた社会に再び抑圧的な「凍てつき」の空気が満ち始めた時代を背景に、主人公ドヴラートフをはじめ若き芸術家たちのひたむきな生が描かれる。

セルゲイ・ドヴラートフ（1941年9月－1990年8月）
ソ連／アメリカの作家。反体制的作家とされ、地下出版で作品を発表した。1978年アメリカに亡命。死後はロシアでも人気作家となる。

配給・宣伝：**太秦** 03-5367-6073／info@uzumasa-film.com

シベリアの愛♥ ロシアと私の出会い

稲塚　俊介（JIC 東京）

2019 年末、東京にあるベラルーシ料理店“ミンスクの台所”で JIC の忘年会がありました。毎年ここで開催しているらしいのですが私は 2 月に入社したばかりだったので、今回が初参戦でした。ベラルーシ伝統料理のドラニキやカルバサを食べながらグルジアワインを堪能して大いに盛り上がりました。

各々が料理や会話を楽しんでいる中、私の隣に座っていた男性スタッフが少し酔いながら周りにロシア語上達の秘訣を熱く語っていました。彼は最大のポイントを“沢山女性とお喋りすること”だと言いました。電話やデートの中で彼女への愛を語ることこそが何よりの近道であると彼は確信している様子でしたし、現に彼は発音がとても上手なのですごく説得力がありました。それでも、ロシア語を学ぶ動機が不純だと思う人もなかにはいるかもしれません。

しかし、私は彼の意見に大いに賛成です。ある言語を習得しようとするときに、それを母語とする人と接するのは当然ですが、特に異性とのコミュニケーションは非常に有益だと考えています。なぜかというと、私自身がロシア人女性とうまくコミュニケーションをとるためにロシア語を勉強し始めて、自由にロシア語でコミュニケーションをとれるようになったからです。ある程度は自分の努力もありますが、一番の要因は 1 人のロシア人女性との出会いだったと確信しています。

そこで今回、私が 1 人のロシア人女性に出会い、ロシアの世界にのめり込んでいった話をお話したいと思います。加えて、私がどのようにロシア語学んでいったのかも併せてご紹介しますので、すでにロシア語を勉強している人や、これから始めようとしている人にとって参考になれば幸いです。

サッカーと海外

私は海外留学経験のある母の元で育ったため、幼少期から海外が好きでした。それは食生活にも表れていて、保育園に通っていた時からブルーチーズとフランスパンが大好きでした（笑）。余りにも好きすぎて保育園のお昼ご飯にまでフランスパンを持参するほどでした。今考えれば奇抜な園児だったかもしれませんが、子供の頃は外国のこともよく分からなかったので、ただ好きなことを受け入れていただけだと思います。

しかし、小学生の時、地元クラブでサッカーを始めてからテレビに映る外国人プレイヤーを頻繁に見るようになると外国の見方が大きく変わっていきました。この頃からサッカーを通じて外国に対する興味が一気に湧いていったのを覚えています。トッティ、カーン、ジダン…今思えば歴史に名を刻んだ選手の全盛期を見られたことは誇りです。また、海外への興味は他のところでも現れてきました。それを象徴するのが 6 年生の時の自由研究。その頃は漢字も大好きだったので世界地図を描いて、60 か国の国名を漢字で書くというのもやりました。その甲斐あってか、小学生のうちに漢字検定 3 級に合格することもできました。何かに没頭するととことんやり込む性格はこの時に芽生えたのかもしれません。

中学・高校に進学してもサッカーをやり続けました。2012 年、そんなサッカー少年もついに大学生になり少しは将来を真面目に考える時期に差し掛かりました。そこで掲げた目標は、「大学ではとりあえず英語の勉強をがんばろう！」という今思うと非常に安直なものでした。将来、自分の息子からこんな言葉が出てきたら張り倒してしまいそうです（笑）。それでも昔からテレビで見てきた海外サッカーを生で観戦してみたいという夢が勉強のやる気を後押ししてくれました。

言語交換サイトへの登録

希望をもって臨んだ大学最初の英語の授業、それは散々たるものでした。その時のガッカリ感は今でも思い出せるほどです。先生は日本人で発音も適当だし実践的な内容は乏しく、高校までの英語にそこまで抵抗感を持っていなかった私は「これはまずい！」、そう思いました。そして大学から家に帰る電車の中でスマホを使って独学の方法を探しました。有名な参考書を買うとか、好きな歌で単語を覚えるなど一般的な方法があるなかで、見慣れない“言語交換”というワードが目に入りました。これは要するに、メールや手紙のやり取りを通じて言語を習得する方法のことを指します。そこで私は 1 つのサイト“Penpal World”をチョイスしました。ここでは自分の母語と勉強したい言語を登録することで、お互いに言語を教え合うパートナーを探すことができます。やり方は様々ですが、お互いの文章をただ添削するわけではありません。あくまで普通の会話の中で使える表現などを身に着けることに重きを置いているため、とても実践的です。もちろん、場合によってはレッスン形式でやり取りするパターンもあると思いますが、私は会話ベースの方がやりやすかったです。早速、利用を始めると本当に様々な国の人からメッセージが来て面白いです。日本にいながらも簡単に異文化に触れられていると実感しました。特定の人と何度かやり取りを重ねれば Facebook や WhatsApp などの SNS に移動し会話を楽しむことが出来るのも便利なので是非、気になる人は始めて欲しいです！

ロシアとの出会い

毎日英語を使ってコミュニケーションをとることに慣れてきたころ、1 通のメッセージが届きました。その送り主は“エカテリーナ”という名前のロシア人女性でした。「高校の世界史の授業で聞いたことがあるような名前だな～」といったのが第一印象でした。その当時の私のロシアに対するイメージは「石油、寒い、プーチン」くらいとサッカーに関することしか思いつかず、要するに全くと言っていいほどロシアに興味がありませんでした。しかし、裏を返せばここで連絡をくれたのは何かの縁かもしれないと思い、返事を書くことにしました。ちなみに、ロシア人の名前には特定の愛称があり、エカテリーナはカーチャになります。色々なパターンがあるので気になる人は調べてみてください。

まずはロシア語の挨拶を Google 翻訳で調べてみると「Здравствуйте!」スマホで音声を再生しても全く理解できなかったです。文字を見ても見慣れたものもあれば顔文字で使う記号(゜Д゜)も混ざっていてチンプンカンプン。それでもコピペをして挨拶メールを送ってみるとすぐさま返事がきたのでやりとりを続けてみました。最初は英語で趣味やこのサイトを始めたきっかけなど様々なことを話しつつ、お互いの国の文化や簡単なフレーズ交換など会話の幅を広げていきました。「フクースナ (おいしい)」「プリヴィエット (やぁ！)」「ハラショー！ (いいね、OK 等」こういう簡単な単語を会話に混ぜるだけでも楽しくなっていきます。もちろん、スマホの設定を変更すればロシア語キーボードも追加できるので試してみてください。

そんなことを毎日繰り返していくと最初は未知だったロシア語も徐々に馴染んでくるのを感じました。文字も複雑だし、YouTube で発音を聞いても何一つ理解できない難解な言語という印象は、ある個人を介して触れてみると意外とすぐに払拭できると気づきました。すると、折角ロシア語に触れる機会を得られたのだからこれを機に少しロシア語を勉強してみようかなと思うようになりました。早速書店に足を運んでみると、ここであることに気づきました。

ご存知の方も多いと思いますが、それは日本の書店ではロシア語の教材をあまり扱っていないのです！英語やフランス語などの教材コーナーと比較するとその差は歴然です。いかにロシア語が日本人にとって馴染みのない「マイナー言語」と捉えられているかが一目で分かります。ちなみに、私はここで独学の教材として「NHKCD ブック新ロシア語入門」（著：佐藤　純一）を選びました。レッスンは 50 課まであり、アルファベット表と CD がついているので初心者にはお勧めだと思います。

ロシア渡航計画！？

いざ参考書を買ってみたものの、ほとんど使うことなく相変わらずカーチャとは英語でやり取りをし、気が付けば知り合ってから 3 カ月が経過し、2012 年も終わりに近づいていました。この頃はチャットサイトから Facebook のメッセンジャーへ移行し、お互いの日常をシェアしながら連絡をとっていました。特に面白かったのはその日食べるご飯や身の回りの物の写真を撮って送ることでした。今は便利な世の中で、どんな画像や動画もインターネットで検索ができます。それでも友達が送ってくれるものは雰囲気がよりリアルに伝わるので一層ロシアへの興味が引き立てられました。例えば、ボルシチの画像をもらった時は「スープの中にヨーグルトなんて合うの？」と聞いてみると、「これはスメタナよ」という返事。答えをもらったものの、「なにそれ？」って感じですね (笑)。それが後に自宅で作るほど私の大好物になるとはこの時想像もしていませんでした。

個人の生活というフィルターを通してロシアを見てみると、遠い存在だった国がどんどん近づいていきました。そしてこの頃、自分の目で実際にロシアを見てみたいという思いが強くなりました。そこで冗談半分でカーチャに「ロシアに行ってみたいな～」とメッセンジャーを送ってみると、まさかの「なら、うちにおいでよ」という返事。ただノリが良いのか建前なのか区別がつきませんでしたが、これも何かの運命と直感しました。その瞬間、親のもとに行きこう言いました。「ロシア行ってくるわ！！」

次号は苦難を経てロシアの地に降り立ちます。(つづく)

外国人のためのロシア語検定（ＴＲＫＩ）練習アプリのご案内

JIC が提携するモスクワのロシア語センターGRINT が外国人のためのロシア語検定（ＴＲＫＩ）の初級・基礎・第 1 レベル（大学入学の最低レベル）に対応する練習問題と模擬テスト、ならびにその結果から合格のために強化すべき点を教えてくれる練習アプリを発表しました。

現在、AppStore および Google Play で無料ダウンロードできます。ただし、まだできたばかりのアプリであるため、できるだけたくさんのロシア語学習者の皆さんに使っていただき、是非、使い勝手や改善点、感想などを知らせてほしいとのこと。是非、ご協力ください。

アプリの詳細（英語）http://russian-language.ru/

アプリは SEMESTERRUS で検索、ダウンロードしてください。

新型コロナウィルス禍
危機の連鎖を断ち切ろう

この 3 ヵ月で世界は一変した。人類は世界的な危機に直面している。中国・武漢市で昨年 12 月に発生した新型コロナウィルスは、ごく短期間に全世界に感染を拡大し、相次ぐ国境封鎖、人の移動の停止、都市閉鎖・休業・私権制限と、グローバルな社会経済システムそのものを機能マヒに陥らせた。3 月末時点で世界 34 億人、世界人口の 4 割以上が外出制限の対象となっている(日経新聞 4 月 1 日)。

社会学者の大澤真幸氏は「ウィルス自体は文明の外からやってきた脅威ですが、それがここまで広がったのは『グローバル資本主義』という社会システムが抱える負の側面、リスクが顕在化したからだと考えています」(朝日新聞デジタル 4 月 8 日)と指摘している。

12 月 31 日に武漢市で原因不明の肺炎の集団発生が報告され、中国政府は 1 月 23 日に武漢市を全面封鎖するとともに 27 日から海外団体旅行を停止した。しかし、1 月 24 日から始まった春節連休で中国人観光客はすでに全世界に散らばった後だった。日本では 1 月 28 日に初の日本人感染者(武漢市からの旅行者を乗せたバス運転手)が確認され、2 月 5 日横浜港に接岸した豪華客船ダイヤモンド・プリンセス号での集団感染が判明した。

このころの報道は中国の「荒業的」な感染拡大防止策と日本でのクルーズ船対応の不備をセンセーショナルに取り上げるものばかりで、JIC にも海外取引先から「日本は大丈夫か？」との問い合わせが入りはじめた。またロシア・旧ソ連に渡航を予定しているお客様からはロシアでの感染状況を心配して相談する問い合わせも入るようになった。しかし、2 月中はまだそれほど切迫したものではなかった。

状況が一変したのは 2 月末からだった。隣の韓国で感染爆発が始まり、3 月上旬には米国と欧州に火がついた。イタリア、スペイン、フランス、ドイツ、イラン、そしてアメリカで感染者が急増し、WHO(世界保健機構)は 3 月 11 日にパンデミックを宣言した。3 月 16 日には全世界の感染者数が 17 万人に迫り、中国の感染者数(8 万 1000 人)を中国以外の国・地域が上回った。それから 4 週間後の 4 月 10 日現在、世界各国の感染者数は 160 万人とほぼ 10 倍に拡大した。

この間、EU(欧州連合)は 3 月 17 日に外国人の EU 域内への入国を 30 日間原則禁止すると発表。ロシアも 3 月 18 日から 5 月 1 日まで外国人の入国禁止措置をとった。アメリカは翌 19 日から全世界への渡航警戒レベルを最高の「レベル 4」に引き上げ、すべての外国への渡航を中止するよう米国人に勧告した。3 月 24 日には夏の東京オリンピックの 1 年延期が発表された。

欧米各国では私権制限を伴う「都市封鎖」が実行され、罰則付きの外出禁止令が出されるなど、社会はさながら戦時下の様相を呈するようになった。当初は「新型コロナはすぐに乗り越えられる」と楽観視していたトランプ政権も、アメリカでの死者が 20 万人に及ぶとの衝撃的な予測を受けて、全国民に呼びかけていた行動制限を 4 月末まで延長すると表明した。3 月 28 日から 4 月 5 日を非労働日としていたロシアは、4 月 30 日まで非労働日を延長した。

こうして今や世界中が新型コロナに席巻され、社会経済システムの機能不全が日々進行しているように見える。

日本でも 2 月 27 日に安倍首相が、3 月 2 日から春休み期間まで全国の小中学校・高校に臨時休校を要請。突然、在宅勤務や休職を強いられることになった人々は混乱しつつも感染拡大防止に協力してきた。しかし、3 月 21 日に 1000 人を突破した国内感染者数は拡大の勢いが止まらず、4 月 7 日についに政府の「非常事態宣言」が発令され、東京、神奈川、大阪など 7 都府県を対象に 5 月 6 日まで外出自粛や営業休止要請が行われることになった。4 月 10 日現在、国内感染者数は 6000 人に迫っている。

有効な治療法やワクチンがない現状では、人との接触をできる限り減らし、感染拡大のスピードを遅らせて、医療崩壊を防がなければならない。医療崩壊が起これば救える命も救えなくなる。

JIC も東京、大阪の店頭応対を 5 月 6 日まで休止し(電話、メール応対は継続)、スタッフの在宅勤務への切替えや一部休業も含めてこの事態に対応してきた。

強制隔離を伴わない水際対策の甘さや PCR 検査数の極端な少なさ、専門家会議のメンバーが疫学研究者ばかりで固められ社会経済全体を視野にいれた危機管理専門家が加わっていないこと、思いつきと人気取りパフォーマンスなど、政府の対応には事後に検証されるべき疑問点が多々あるが、今はともかくも全国民が一致協力してウィルス封じ込めに力を合わせるべき時だと思う。

それにしても人の移動の制限は、人々の交流を生業とする旅行業の停止を意味している。国境封鎖は海外旅行そのものの否定であり、私たち旅行会社は存在意義を失ったに等しい。「観光需要の蒸発」によって、アウトバウンド旅行もインバウンド旅行も大幅な売上減は避けられない。

観光業・旅行業だけでなく、人の移動の制限は経済全体に甚大な影響を及ぼすものだ。テニスやサッカー、野球などスポーツイベントが中止され、コンサートも相次いで中止、延期された。

緊急事態宣言で多くの飲食店や教育文化施設が休業に追い込まれ、中小企業は倒産の危機に瀕している。

問題は、この新型コロナウィルス感染拡大の「出口」がまだ見えないことである。市場が落着きを取り戻すためには、何よりもまずウィルス封じ込めに成功しなければならない。感染拡大のスピードを遅らせたり、感染者数を減らしたりすることはある程度可能としても、それだけでは根本的な解決にならない。一刻も早く、有効な治療法の検証とワクチンの開発が望まれる。

現在、各国政府がとっている『封じ込め対策』、つまり外出制限、都市封鎖、渡航制限は短期的には一定の効果があるとはいえ、しかし問題の解決にはつながらない。それは新型コロナウィルスにとって国境は意味をなさないからだ。先進国が今後数ヵ月のうちに抑え込みに成功したとしても、パンデミックがどこかで続く限り、新型コロナはまた繰り返し襲ってくるだろう。その時、一番犠牲になるのは医療・衛生環境が整っていない発展途上国だ。ウィルス対策として、手洗い、うがいが奨励されている一方で、ユニセフによると世界人口の 4 割に当たる 30 億人の住宅には水と石鹸で手を洗える場所がないという現実がある。

社会経済ステムがグローバルに繋がっている現在、地球レベルでの連帯なくしてウィルスの脅威に対抗することはできない。にもかかわらず、多くの国は相変わらず「自国第一」でこの問題に対処しようとしているように見える。トランプ大統領が口にする「中国ウィルス」という表現に含まれる「黄禍論」的差別主義、ネット上にあふれるデマ情報、偏狭なナショナリズムが国際協調を妨げている。人々は危機的な状況下では不確かな情報に飛びつきやすい。不安が大きいほど、あれかこれか物事を単純化して、安易な解決策を求めてしまいがちだ。

だからこそ、今、民主主義と国際連帯が世界中で試されている。民主社会においては、何が合理的なのか判断するのは市民自身だ。そのためには正確な情報をきちんと提供したうえで、市民の良識に働きかけなければならない。

ワクチン開発や医療資材の供給で、国を超えた協力を進めなければならない。イギリスのブラウン元首相が「一時的な世界政府の樹立」を呼びかけたように、またロシアのプーチン大統領が国連機能の強化を呼びかけたように、各国が協力して効果的な感染対策がとられることを期待したい。

長崎大学の山本太郎教授は「感染症のパンデミックが社会変革のきっかけになることは十分にあると思います。……例えば、中世の欧州を襲ったペストは、急激な人口減を引き起こすことで労働者の賃金を上昇させ、封建制度を崩壊につなげました。病を治せない教会の権威は失墜し、宗教改革やルネサンスが起こる一つのきっかけとなりました」(毎日新聞 3 月 12 日)と述べている。

その意味で、困難な今こそ変革へのチャンスと捉えて、私たちの生活や社会の在り方を考え直していかなければならないと思う。(2020 年 4 月 11 日／伏田昌義)

＊＊JICのロシア語留学・研修＊＊

30 年間の実績「だから、JIC のロシア語留学」

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 30 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 3,800 名以上にのぼります。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ごとや、緊急事態の際の連絡対応など、留学される皆様をバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

ロシア語長期留学９月生・募集中

相談受付中！
早めにお申込みを!

期間：2020年9月1日より10ヶ月

締切：2020年６月15日

モスクワ国立大学 725,000 円(授業料 10 ヶ月)　予価
ｻﾝｸﾄ･ﾍﾟﾃﾙﾌﾞﾙｸﾞ国立大学 798,000 円(授業料 10 ヶ月)
ｳﾗｼﾞｵｽﾄｸ極東連邦大学 344,000 円(授業料 10 ヶ月)
ミンスク国立言語大学 335,000 円(授業料 10 ケ月)

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金および取得手数料などがかかります。

◆JIC ロシア留学デスク◆
ロシア留学・旅行のお問合せ・ご相談に応じます。
お気軽にお越しください。
東京事務所　平日 9:30-18:00　03-3355-7294
大阪デスク　平日 9:30-16:00　06-6944-2341
※留学相談は、必ず事前に予約してお越しください

◇◆編集後記◆◇

▼新型コロナウィルスのパンデミックによって、この 3 か月で世界の様相はガラリと変わりました。わが JIC も大ピンチですが、ここはじっと耐えて、時が来るのを待つしかありません。「まだまだ、生きてるぞ」という印にいつも通り定期発行しました。▼本号は、昨年 11 月の JIC ロシアセミナーでの貝澤哉先生の講演録、また京都のレストラン「キエフ」で行われた研究会での五十嵐徳子先生の講演録を中心に編集しました。どちらもロシアのジェンダー状況を取り上げて、読み応えのある内容となっています。▼新型コロナの 1 日も早い終息を願いつつ(F)